

翻刻

『詠歌大概註』

(書陵部蔵五〇一・四八五)

『詠歌大概抄』

(書陵部蔵五〇一・四八〇)

林 達 也
 伊 藤 氏
 杉 山 俊 一 郎

本稿は宮内庁書陵部蔵『詠歌大概註』、『詠歌大概抄』⁽¹⁾を翻刻するものである。
 両書は、既に翻刻・紹介がなされており、『詠歌大概註』は土田将雄氏⁽²⁾に、『詠歌大概抄』は今井明氏⁽³⁾によって翻字の上、解説が付されている。両書の詳細な書誌的事項は二氏の報告を参照されたいが、ここで当該二写本の簡略な書誌を記しておきたい。

『詠歌大概註』

一冊 袋綴 墨付四十四丁

外題

詠歌大概註宗祇作 (表紙左上)

内題

詠歌大概

奥書

(本奥書 / 秀歌之躰大略の前)

以朱書八後法成寺殿宗祇法師二御傳受之時聞書ノ分ヲ / 被加御筆者也尤可為極秘義者哉 / 于時天文廿年霜月一日

義俊御判

(本奥書 / 秀歌之躰大略の末尾)

宗祇注云々 / 此式冊以大覺寺准后御秘本写之 / 加校合 / 畢最可謂后代之證本焉卒 / 莫許外見而已 / 藤孝

(書写奥書)

這一冊借賜 / 法皇御本遂書寫校合畢 / 享保十六年三月權大納言光栄

請求番号

五〇一・四八五

『詠歌大概抄』

一冊 袋綴 墨付四十三丁

外題

詠歌大概抄宗祇作 (表紙左上)

内題

准三后

詠歌之大概

奥書

(本奥書/秀歌躰大略の前)

随毫味之覚悟云々

祇注如件

(書写奥書)

這一冊借賜/法皇御本遂書寫校合畢/享保十五年仲夏權大納言光栄

請求番号

五〇一・四八〇

両書は外題に記されているように宗祇のいわゆる詠歌大概注であるが、土田氏は『詠歌大概註』を甲本とし、『詠歌大概抄』を甲本に対し異文を持つ乙本と位置付けている。⁴⁾ 今井氏は土田氏の分類を受け、さらに諸伝本を調査され、甲本系をA類(第一種・第二種・第三種)、B類、C類の三類と、乙本系に分類されている。⁵⁾ 記載内容「秀歌之躰大略」の例歌の注釈内容の相違から右のように分類されており、氏の分類によると『詠歌大概註』は甲本系A類第二種に、『詠歌大概抄』は乙本系に属することになる(本稿もこの分類に従う)。

このように両書の記載内容の相違点と基本的な分類は二氏によってなされているが、重複することを恐れず、確認のため両書の相違点を挙げておきたい。

甲本は論述部の注釈から始まるが、乙本ではまず漢文体の論述部を記し、後に論述部の注釈が続く。

甲本は乙本にある頭注、内題下の小書を欠く。

甲本の本文中にある注文（朱書）を乙本は欠く。

甲本と乙本では「秀歌之躰大略」の和歌の配列順に異同がある（甲本7番歌は乙本では8番歌、甲本8番歌は乙本では9番歌、甲本9番歌は乙本では10番歌、甲本10番歌は乙本では7番歌に置く）。

乙本は38番歌「よみ人しらす」詠に対する注文を欠く。

乙本は75番歌道真詠の第三句以下を欠く。

右に挙げたのは顕著な相違点であるが、総じて論述部の注釈は語句の異同はあるものの、両注の内容は一致しており、例歌に対する注文に大きな相違点が見られる。例えば、土田氏が指摘するように、3番歌「梅か枝に」の注釈は、甲本では「羽しろたへにあはゆきとはうぐひすのうづもるゝ様にはあらず、むめがえにうつりきてなくうぐひすのつばさに淡雪のつすくとちりかゝりたるさまの言語道断なる心をよめるなり」とあるのに対し、乙本には「……いまだ春浅くて、鶯はうつろへども猶ふる雪にふりうつもれて、はね白妙にといへるなるべし」とあり、甲本は乙本に反駁している。ここから土田氏は甲本は、乙本より後に成立したのではないかと想定され、さらに宗祇注百人一首抄に文明十年奥書本系統と明心二年奥書系統本とがあることを想起され、「秀歌之躰大略」中の重複歌と比較すると甲本は明心二年本系統に、乙本は文明十年本系統に近似しており、著作年代の異なる二つの詠歌大概注があったと考えるべきかもしれないと想定される。⁶⁾ 今井氏はこれに対し甲本・乙本の先後関係を問題にするには土田氏の指摘箇所以外になく、明徴さを欠くとし、先後関係は結論を保留せざるを得ないとしている。⁷⁾

このように甲本と乙本では「秀歌之躰大略」の注釈内容に異文関係にあるものが多く、甲本と乙本の注の関係には

いまだ問題が残されている。

ここで宗祇詠歌大概注の基本的な性格と後世に果たした役割を見ておきたい。

詠歌大概は定家の歌論書の中で最も大きな影響を後世に与えていることは言うまでもないが、漢文体の歌論部分は二条家の骨子となり、基本的な歌作態度・本歌取りの技法などは後世の歌人の規範となっており、江戸期には三部抄伝授の一つともされている。宗祇注以前には東常縁が宗祇に講釈した聞書が「土岐東常縁作之云々」⁽⁸⁾の形で残っているが、単独の著作としては宗祇注が現在のところ詠歌大概（以下、大概）注釈史の嚆矢となるものである。宗祇注は大概注釈史上最古のものであり、後の注釈書・聞書の類で「祇注」として頻繁に引用されており、以降の注釈に大きな影響を与えている。一步踏み込んで言えば宗祇注はそれ以降の注釈の基盤となっている。例えば大概注釈史上最も大きな問題であった「情以新為先求人未詠之心詠之」の言句について、宗祇は「心詞を少し取りかえることで詠歌を新しくすると言つ（甲本一丁ウ、二ウ、乙本三ウ、四ウ参照）が、幽齋の『詠歌大概抄』に、

祇注に新をもつて先とすといふ心大事也。此詞に一つの習あり。先達云みるによろしくと心をふくませて心得る所習也。先むかしよりかゝる作意なしと人のおどろく所、又人の常によみならはしあるは又目にもかゝらず心詞を少引かへてあらぬ物にしるす事堪能の思ふ所なり。⁽⁹⁾

と宗祇注を引き、中院通茂も、

此詞、新為先ノ余意ヲ云也。新為先トバカリアリテハ後世ノモノ異様ニナリヤスキユエニカクイヘリ。宗祇ナドモ此処大事ナリ。⁽¹⁰⁾

と注する。

右以外にも宗祇注と以降の注は通底する文脈が多く、宗祇注は大概注の原点であり、またよるべき注釈であったと言えよう。

宗祇注以来連綿と続けられてきた大概注釈史は中世中期から近世末期に及ぶものであり、歌人のみならず、連歌師になる注釈書も見受けられる。特に、近世には前記したように伝授事の一つにもなり、後陽成院・後水尾天皇・靈元天皇に注釈書がある。堂上歌人においても聞書などに多くの記事が見られ、最重要視されるべきものであった。地下歌壇においても事は同じであり、寛永十五年（一六三八）には『三部抄之抄』が刊行されており、平間長雅に『詠歌大概安心秘訣』、『詠歌大概抄講談密註』、加藤盤齋に『三部抄増註』（寛文九年 一六九九 刊）がある。

当該注釈史は右記のように長期間に渡るものであるが、基本的には宗祇注あるいは幽齋の注によりながら注釈を施している。しかし、時代によって少しく物言いが変わっており、前記した「新」をめぐっては、後水尾天皇は

情以新と云は体のふるく聞ゆることを避て、風情を新しく施すことを第一とすと云心也。近来古往先賢詠じ尽したる情を、後世末字のせばき胸中より、新しき心は得がたき也。さらば何と云に、風情新しくしたて様さへ珍くあれ(11)ば、情の新きやうに聞ゆる也。(11)（『詠歌大概御抄』）

と「風情」を新しく仕立て直すことで詠歌を新しくしようとする。これが中期の烏丸光栄になると、

さて仰に、古人の歌をへつらひてよむ事、初心にある事也。古人の歌をへつらはずして我心よりよみ出せば(12)いつにても新しき也。畢竟誠の一より新しくなる也。とかく心の明白になる事なり。(12)（『烏丸光栄卿口授』）

とあり、「誠」から詠歌が新しくなるとする。さらに靈元天皇は、

朱子注 明明之、明之則自新ナリ。自新ナレバ新民するところ明之は情也。

新ナルハ即此新ノ字ニ可叶歟。四書大全北溪陳氏曰、新与旧対 明者昏則旧矣 感発開導去其旧汚則昏者復明也。

又成一箇新底是新之也。明にさへあれば、趣向のふるき事なし。あたらしきを外にむかひて求めるにあらず、本心

さへあらたならば、をのつから新くなるべし。(『詠歌大概圖書』 靈元天皇述ノ京都大学附属図書館、中院文庫蔵)

と、朱子注を引きながら「本心」が新しければ詠歌も新しくなると言い、後水尾天皇の「風情」「したて」を作歌技術によって新しくするという態度から、心そのものに「新」を求めるといふ方法に転換されている。⁽¹³⁾

このように諸注釈を引くと、その時代によって注釈の内容に変遷があり、先行する注釈との関係や後の注釈ではどのように受け継がれているのかということを見ると、注釈史の縦軸を見ることができ、また同時代歌人の言説を参看すれば、横軸の線上も見ることができないかと思われる。

また川平ひとし氏は詠歌大概の近世初期の注釈テキストの圏域として、「宮中仙洞域の圏域」「親王・延臣の圏域」

「地下一流の圏域」「それ以外の非公家の圏域」の四つを想定されているが、⁽¹⁴⁾近世に著わされた多くの諸注釈を見る上で、階層別に捉える視点も必要になると思われる。

最後に本稿の発表意義を記しておきたい。本稿で翻字した両書は前記したように土田・今井氏によって全文翻字があるが、宗祇以来の注釈史を有する大概注釈史を見るとき、宗祇注はその原点であり、後世に与えた影響を考えると、看過できないものである。また甲本と乙本の本文異同について細かに明示されているものはなく、本誌掲載を機に両

書の異同を一括して挙げた。幸い両氏の翻字が存するので、その翻字と本稿の翻字の異同も記すことにした。大概注釈史の最初に位置する宗祇注の二種の本文をより精度の高いものとし、併せて両書間の異同を明示することで、宗祇注内部の問題点を明らかにすることが本稿の目的である。

(伊藤達氏)

引用の資料には、旧字体は通行の字体に改め、清濁・句読点を私に付した部分がある。

付記

本稿は詠歌大概抄研究会と称して、本学国文学科教授林達也・本学非常勤講師伊藤達氏・本学修士課程在学杉山俊一郎の三人が毎月一回のペースで集まり、各自翻字の上、本文の検討・確認作業を行ったものである。当研究会のメンバーはまことに少数であるが詠歌大概の注釈のありよう、あるいは注釈史の現在的問題などを参看することを目的にしたものである。近時、詠歌大概に対する新たな知見や仮名本の受容に関する論考が発表されているが、こうした研究状況の中で当研究会は、もう一度大概注の原点である宗祇注の本文を精査することで、当該研究に対する足掛かりを得ようとしたものである。なお、本稿の発表は当研究会にとって第一歩であり、引き続き詠歌大概に関する注釈書の調査・検討を重ねていきたい。大方のご批正を賜れば幸いである。

翻刻を快く許可下さった宮内庁書陵部に感謝申し上げます。

注

(1) 国文学研究資料館マイクロフィルムに拠る。

(2) 久松潜一・土田将雄『詠調之大概』(昭和四十二年九月、笠間書院)

- (3) 「翻刻『詠歌大概抄宗祇作』(書陵部蔵五 一・四八)」(『鹿児島短期大学研究紀要』四十二号、一九八八年十月)
- (4) 注(2)に同じ。
- (5) 「詠歌大概宗祇抄(含「伝常縁注」)について」(『鹿児島短期大学研究紀要』四十四号、一九八九年十月)。なお、同じく乙本系の本文を持つものとして、陽明文庫蔵『詠歌大概抄』が挙げられている。
- (6) 注(2)に同じ。
- (7) 注(5)に同じ。
- (8) 伝常縁注は『詠歌大概聞書抄』(書陵部蔵)に宗祇注と合写されている。
- (9) 『歌學文庫』三(明治四十三年十二月、一致堂書店)
- (10) 『溪雲院殿御説詠歌大概秘抄』(国文学研究資料館久松潜一コレクション)
- (11) 『御撰集』第五卷(大正五年九月、列聖全集編纂会)
- (12) 『近世歌學集成』(中)(近世和歌研究会編、明治書院)
- (13) このことは大谷俊太氏(「注釈と堂上和歌『詠歌大概』冒頭の一句の解釈をめぐって」(『近世堂上和歌論集』所収、平成元年、明治書院)に指摘がある。
- (14) 「一 伝定家筆録『射法故実書』二『詠歌之大概』諸抄採拾、近世和歌手引書類所載の註二種」(『跡見学園女子大学国文学科報』16、昭和六十三年三月)
- (15) 川平ひとし氏に「詠歌之大概」の成立時期(「中世和歌論」所収、二〇〇三年三月、笠間書院)、「詠歌之大概」一本考定家自筆本探索のために(「同右書所収」)があり、享受史を論考したものと、真名本から仮名本へ『詠歌之大概』享受史 指定のために(「中世和歌テキスト論」所収、二〇〇八年三月、笠間書院)、「一 伝定家筆録『射法故実書』二『詠歌之大概』諸抄採拾、近世和歌手引書類所載の註二種」(『跡見学園女子大学国文学科報』16、「中世和歌テキスト論」CD-ROM所収)、「詠歌之大概」諸抄採拾(二) 霊元院抄」(『跡見学園女子大学紀要』第二十二号、同右書CD-ROM所収)がある。また「定家における 古典の基底小考『詠歌之大概』から一照射」(『跡見女子大学人文学フォーラム』第二号、二〇〇四年三月)がある。なお、浅田徹氏に定家の歌論書のありよつを論考した「近代秀歌と詠歌大概『歌論書』とは何か」(『講座平安文学論究』第十五輯、平成十三年二月、風間書房)がある。

今井氏には前掲論文以外に、『自讃歌注』との比較を試み宗祇の注釈宮為を論じた「宗祇注ひとつの問題」(『文芸と批評』第九号、文芸と批評の会)があり、宗祇注以外では「詠歌之大概宗祇養抄の一考察」(『中世文学』第三十四号、中世文学會)がある。仮名本に関しては、「仮名本詠歌大概」の問題」(『中世文学』第三十号、同前)、「翻刻 伊達文庫蔵『仮名詠歌大概』」(『研究と資料』第十号、研究と資料の会)、「翻刻 宮内庁書陵部蔵『定家十体』」(『国文学研究』第八十二集、早稲田大学国文学會)がある。

凡例

- 一、漢字の字体は、旧字・異体字・略字などは通行の字体に改めた。但し、哥・躰・鷹・峯などは、そのままにして底本の面影を残した。
- 一、底本の明らかな誤写・誤字は該当箇所(ママ)と注記した。
- 一、送り仮名は底本の表記に従った。
- 一、仮名遣いは底本の表記に従った。
- 一、句読点・清濁は付さなかった。
- 一、慣用的な合字は平仮名に開いた。
- 一、「ハ」「ミ」「ニ」などの片仮名表記の助詞は平仮名に開いた。
- 一、底本に訂正(見せ消ち・補入)がある場合は、訂正後の本文に従った。
- 一、改行は底本の本文に従った。
- 一、乙本の頭注は、その丁の最後の()内に挙げた。
- 一、丁移りは、(一才)のごとく記した。
- 一、甲本に記される朱書の注は、()で示した。
- 一、甲本と乙本の異同は、本文の後に付した。(『秀歌之躰大略』の注文の異同については、異文関係にあるものは挙げなかった。また作者名の異同はとらなかった。)
- 一、土田・今井氏翻字と本稿の翻字の異同を最後に付した。

『詠歌大概註』

詠歌大概

此書を詠歌大概と号する事其理あらはなりといへとも

大概といへる其程はかりかたくやおほかたといふにおなじやうに

は侍れと猶又さして難弁者也たとへは世俗に十の物七八

はなといふ事ありそれになすらへて可心得にや侍らん心は

大綱網目の義なりあみのめは数をしらぬ物といへと大

網の一すちをひけはみなそれにしたかふこかとかく家々の

をしへ心々の故実書をける物数しらすといへと此一冊の

下にもれるなるへし猶雖有種々義所令省略也

大概 大略 大躰 大方此三はいつれもおなじ事也(一オ)

情以新為先求人未詠之心詠之此心といふに情字を書る事其義

甚深也こころといふには心意識とて三の心あり心のこころは

さらにはたらかぬ心也意の心はすこし分別する意なり

識のこゝろは物をくはしく了知するこゝろ也情字は識の心
なり歌をよむ時は心を天地にめぐらし性を草木禽獸
になすらふる物なれば情の字を書事おもしろきなり

其上此書にかきらす定家卿の物を作したまへるには

古今集をもととして道をたてたまふ也古今集にやまと

うたは人の心をたねとしてとかける心はうこかぬこゝろ也見る

物きく物につけていひいたせるなりといふ所此情の字

にかなへり仍此字を書給なりとそさて情以新為先と

いへる下の小書に求人未詠之心詠之といへる此詞まことに(一ウ)

道の肝心也

(先達みるによるしきと云は人未詠心あたらしきをといへるいかなる

めつらしき事をかしけなる詞をよまんと思ひていましめて

先達のみるに宜とおもはんをまなひよむへきの心也)

此心なくはいかてか作意といふ事侍へからんいかにも道なき所に

むかひて道をもとめ及はぬさかひにのそみてあたらしくよ

まむと心をかへき也但又此下に先達みるに宜といふ詞を

くはへていへり学者可思慮此旨故は人のいまたよまさる

心をもとめよといふに二の心侍るへき也先昔よりかゝる
 作意なしと人のおとろく所又常に人のよみならはしあるは
 又めにもかゝらすふるめきはてたる心詞少引かへてあらぬ
 物にしなす事堪能の思所也たとへは古今の歌に(二才)

よみ人不知

いつはとは時はわかねと秋のよそ物思ふ事の限り成ける
 と侍るをとりて定家

いつはとはわかぬときはの山人もそらにおとろく月の影かな
 すこしのかはりにて物のあたらしくなる支証也

拾遺に兼盛

我宿の梅の立枝や見えつらんおもひの外に君かきませる

とあるを定家卿

とへかしな立枝は梅のみえすとも匂ひをこめてたつ霞かは

とつかへたるはまことにあたらしくこそ侍れ如此類其限なくこそ

いづれも作者の思へき所也

詞以旧可用といへる下に詞不可出三代集と有又新古今

古人哥同可用之云々三代集にも詞あしからんは不足(二ウ)

用之又三代集の詞ならねと讀いてたるいくらも侍也但是は
 学者にあしき詞をのそくへきのいましめ也新古今古人
 哥同可用之と侍るは三代集に准したる詞の心也返々

三代集を出へからすといへるは作者の思入所のきはもなき
 まゝにいかにそや成行をも詞のたゞしくきよらなるをもつ
 て作たつれば心もけたかく成てしかもあたらしく又感ふ
 かき者也世上の人のうへも詞つかひにて其人の心優にも
 いやしくもなれる物也定家卿の読方の口伝に心は新く
 詞はふるく心は直く詞は艶にといへり心の直く侍らんに
 こと葉艶ならずは歌さまみくるしく侍るへしとそ (三才)

風躰可憫堪能先達之秀歌此下の小書に不論古今遠近

見官哥可憫其躰といへり秀歌といふは哥にとりて

無上の事也是第一の難義たるによりくはしく書給へる

なり其故は堪能の先達ならぬも秀歌をよみいつる事

はあれともそれは本とするにたらず又堪能の先達なれ

はとて毎度秀哥は侍らぬ物なれば先達の堪能の

秀歌にならふへしといへり大切の教也古今遠近

を論せずよろしき歌を見てといへるは上中今に
わたるへき心也其意趣おくの百首にみえ侍り

(此上中今にわたるへき ト八古今作者相交事也)

返々歌は風躰第一の事也とそよみいつる哥の風躰

あしければ其身よろしからぬ事ありといへりいかなる(三ウ)

を風躰あしきと云へきならば雨中吟十七首也雨中吟

と号する事ならひある事とそ其哥の中雨にきこ

ゆる荻の音哉うちしめりすゝきのうれはおもりつゝにし

ふく風になひくむら雨星もなく雲間もしらぬ

雨の夜に猶またるゝは山のはの空此十七首未来記

五十首よりも少すかた(つらひれ 愁なつむやうの心也)つらひれものむつかしく心

はれくしからす(健也すくやかにもあらぬといへる詞也)くよかならぬ心する哥也尤歌にいまく

しくうれはしきさまとてきらふ風躰也詩云治世之音

安以楽乱世之音怨以怒といふ事も其声をもつて盛

衰をはかり知事侍にや我国はことに歌の道よりよろ

つのことわさおこり侍れはたゝしき所を思ふへくこそ

されは定家卿撰をかるゝ抄ともいつれもつよき歌を(四才)

本としたまへる由みゆたゝしき歌の詞(うたはしき実也并たの心也)きよくうるはしき
 か詠吟するにめてたくきこゆるもあるは人にをくれあるは
 身ひとつに愁ある人の述懐など各別の事也それには
 あらて心詞とゝのはすしていまはしきすかたなるか不可
 然と也但いつれのさまをよめりとも詠吟よくとゝのひ
 たらんを風躰よしとはいふへきとぞ聞侍りしこれ詩に
 いへる心に相叶へくや(毛詩の義理にあなしと云事也)

近代之人所詠出之心詞雖一句謹可除棄之

下の小書に七八十年以来之人歌所詠出之心詞努

不可取用之これは制の詞とて風そかすむつるも

くもる花の露そふなとやうの詞也七八十年とさせ

る所はかりかたし若建保四年に拾遺愚草を(四ウ)

撰給し其比をもつていはゝ崇徳院御代天治

大治などの事と可心得にや

於古人哥者多以其同詞詠之已為流例

此心詞は別してこもれる義なし

但取古歌詠新哥事五句中及三句者頗過分

無珍氣二句之上三四字免之猶案之

五句之中及三句事無珍氣者也其義明也二句之

上三四字免之とは如何たとへは定家卿哥に

足引の山桜戸をまれにあけて花こそあるし誰を待らん

此哥は万葉集に

あし引の山桜戸をあけおきて我待君をたれかとむむる

といふを三字とれり又同卿歌(五才)

年ふれは我黒髪も白系のよるは仏の名をとなへつゝ

ひかきの姫哥後撰集大式高遠か肥前へ罷下水を

のまんといひけれはもとみしひかきの姫かくいひ侍る

としふれは我くるかみも白河のみつはくむまで老にける哉

と三字とれりさて猶案之と侍るに尤其心あるへし

其故は古哥二句之上三四字とりて子細なきも侍へし

又とりてあしきも侍へきの義也いかなる哥をとりて

よむ時三四字くるしからぬとならば此末に足引の山郭公

みよし野のよし野の山久堅の月のかつら郭公鳴やさ月

玉梓のみちゆく人なといへるうたは二句に更に

文もなくしてめつらしき所なしかやうにことなる事ながらん
 詞つゝきたらむは其上三四字とりそへたりともくるし(五ウ)
 かるましきの心也一ふし文ある詞二句つゝきたらむ

三四字免之義はあるましき故に案之とは書給へるなり

されは黄門定家の二首足引の山桜戸といふもとしふれば

わかろるかみもと待るもめつらしき所なき故に三字つゝ

とり加てよめる也猶すゑにとしのうちに春はきにけり

月やあらぬ春やむかし桜ちる木の下かせほのくくと

あかしの浦如此類雖二句更不可詠之とあり二句さへ

如此いかにもよく可有分別事也家隆卿哥に

山河に風のかけたるしからみの色にいてゝもぬるゝ袖哉

といへるは古今集に春道列樹か哥

山河に風のかけたるしからみはなかれもあへぬ紅葉なりけり

なかれもあへぬといふ哥を四字とりそへてよめる風の(六オ)

かけたるしからみ尤めつらしき詞也定家卿のこゝろには

相違せりいかにも此抄のをしへを守へき者也

(二句の上四字迄とれり又風のかけたるしからみはいたりて

めつらしき詞ともなればかやうの哥をは二句も取かたき事也

以同事詠古歌詞頗無念歟下詞に以花詠花以月詠月

といへり是を無念の由見えたり是は毎度の事也

黄門時代殊おほき事にや

てりもせすくもりもはてぬ春のよのおほる月夜にしくものそなき

と侍るをとりて定家卿

大空は桜のほひにかすみつくもりもはてぬ春の夜の月

大江千里（六ウ）

（古今）

月見れば千々に物こそかなしけれ我みひとつの秋にはあらねと

といふをとりて長明

（新古今）

なかむれ八千々にもの思ふ月に又わかみひとつの峯の松風

遍昭

いそのかみふるの山への桜花つへけむ時をしる人そなき

（新古今）

いそのかみふるの桜たれうへて春を忘れぬかたみ成らむ

万葉

旅にしてつま恋すらし郭公神なひ山にさよ更て鳴

新古今後鳥羽院御製

をのかつま恋つゝなくやさ月やみ神なひ山の山ほととぎす

なとやうにおなし古哥の花鳥月なとよめる事はおほく(七才)

侍れと初心の人末学の輩なとはこの旨を守たらむ

可然哉何事も人により時にしたかふへき事とそ

以四季歌詠恋雜歌哥以恋雜歌詠四季哥如此之時

無取古歌難歟

此心はたとへは万葉に

我宿の梅咲たりと告やははこてふにゝたり散ぬともよし

古今

月よゝしよしと人につけやははこてふにゝたりまたすしもあらず

万葉

朝日影にほへる山にてる月のおかざる君を山こしにして

新古今 有家(七ウ)

朝日影にはへる山のさくら花つれなく消ぬ雪かとそみる

如此本歌をはとるへきのをしへ也但恋歌をとりて

そのまゝ恋をよみ雑歌にて雑をよむ如此よめるも

ならひなれと先此抄を仰へき事学者の心成へし

とそ近代之人所詠出之心詞雖一句謹可除棄と

いふよりこゝまでは其色々の趣皆以本歌を取て

哥をよむへきの故実也誠こまやかなる教にや

常観念古歌景気可染心此道の好士古思ふへき所は

此一段也寛平以往の哥はたけたかくたしかに心幽に

余情かきりなし仍いつれの先達のをしへにもかはらぬは

たゞ此一義なり(八才)

殊可見習者古今伊勢物語後撰拾遺卅六人集之内

殊上手歌可懸心丸貫之 忠孝
伊勢 小町之類

(基俊俊成頭輔清輔等にわたるへきの由也切紙アリ口伝アリ)

或説伊勢物語を古今後撰中に置事古今は

花実相兼たる集也後撰は実過たる集也伊勢物語花過

たる物なれはとりあはせて古今の下にをけりと云々不

用之当流の心は伊勢物語は古今以前の物なれと

古今は此道の奥儀也仍第一にをく所なり彼

物語又久しき物なれは後撰拾遺より末には

をきかたきゆへに第二に是ををけるなりとそ

又三十六人集をあけて上手の歌といへる尤

無双の事にや此五人をあけて類といふ(ハウ)

詞五人外に猶是に准する人ありとみゆ

尤可習知事とそ

(たくひとあれは残あるへきやうに見えたり然に今此十四人

切紙所載は哥仙の中にも一段の上手面白哥よみと心得へき也

抑哥仙の人数はいさなきいさなみのみことの神詠の数也十八

つゝ侍るを合すれば卅六ありこれによりて也

又三十一字の哥にも是を用也又五文字あまる所をは

五句に用也是極秘也不可解説而已猶有口伝之義)

雖非和歌先達時節景氣世間之盛衰為知物由

白氏文集第一第二帙常可握翫（九才）

（時節景氣世間盛衰も其さかりをとろへの躰をみれば

動やうにて人に物ををしゆるに似待ければ先達に對してかくにや）

時節之景氣を先達に對していへるは如何とおほえ

侍れと心をみちに引いるゝものは時節之景氣世間之盛

衰也誠おもしろくこそ時節景氣とは花鳥月雪

朝の露夕の煙山野草木この事は誰か是をわき

まへさらむ哥人は人の心もいたらぬさかひものゝあやめも

わかれぬやみの夜のそらにも心を付へき事肝心

たるへし家持かわたせるはしにをくしものと

よめる心にて可思之ことゝぞ

（家持か橋の哥歌よみは晴のよの空にも心をつけてこそ

かゝる哥をもよみ侍ると人にさとらしめんかために是をとり出てかく也）（九ウ）

又時宜を時節の景氣のうちにとるへしとこそ所謂業平

惟喬のみこにわりなくとめられてくるしくは思ひながら

枕とて草ひきむすふこともせし秋の夜とたに

たのまねなくといひ又人の前裁に菊つへけるに

うへしうへは秋なき時やさかさらはなこそちらめねさへかれめや

なとよめるみなその心也芹川の行幸に行平卿

おきなさひ人なとかめそかり衣今日ばかりとそたつもなくなる

とよめるはをのかよはひを思ひけれと時の御門五十七に

ならせおはしましければ御けしきあしかりければされは

時宜を時節のうちにいへる事面白也世間盛衰

是又作者のことに思ふへきことはりなり盛衰は人にかき(十才)

るへからすひる夜の月日みな成住壞空却にはな

るゝことなく此理を思へはいはすしてこと葉うちに

うこく物なりされは道の専一たゝ此事にや又白氏

文集第一第二といへるは長恨(哥)琵琶行などの事也

楽天か文はやすらかにしてしかも哀深く侍故にふかく和

哥の心に通すといへる也常可握翫とは左右をはなたす

見るへきの心也物のよしをしらむかためとは此道は仮名の

四十七字をいてすして心をつへき物とはいへとも才覚

なくてはかなふましきの心也始に心はあたらしきをといふ

より一々此道の学者可思慮之大綱なり仍哥を

よむの大概明者也（十ウ）

和歌無師匠只以旧哥為師染心於古風習詞先達

者誰人不詠之哉 此詞は始に立かへり和哥の大すぢめ

をいへるもの也以旧哥とはいづれの時をさすへきとならば万葉

をさきとして寛平御哥合三代集までを云へき

にや上に和歌無師匠といひて詞を先達にならば

と侍れば事たかふやう也但詞を先達にならば外

無師匠と云義也猶以無師匠といへる事可子細者也

（詞を先達に習外は無師匠と云の心也猶又哥道は思立

心なくてはの義にて心より外には無師匠と云也

やまとうたは人の心を種とするといへる此理に相叶者也）

秀歌之躰大略（十一オ）

此大略といふ心は詠哥大概とかける同心也秀哥は

かきりなしといへと此百首を大略とする義也此内

当時之哥侍るは古今遠近を論せすよろしき

哥を見てといへる其始終也

(以朱書八後法成寺殿宗祇法師二御伝受之時聞書ノ分ヲ

被加御筆者也尤可為極秘義者哉

于時天文廿年霜月一日 准三后義俊御判)

壬生忠岑

1 春たつといふはかりにや三芳野の山もかすみて今朝はみゆらん

此哥は公任卿は和哥の九品の最上として定家卿は

この百首の巻頭とせり此已下みな種々の風躰(十一ウ)

ありといへとも尤可為秀歌規範者也とりわけ

吉野の山をとり出る事は春を用心也花などの

在所なれはなり昨日のけしきにかはりて此山の

あらたにうちかすみたるを感じてよめるなるへし

此哥を或人の堯孝法師に尋給ひしにいひもて

おもしろき心は何ともいはぬ堺なりされともかくし

たてられん物かはといはれしと也無上至極の哥

なれはこそ上品上生には入られけめ

光孝天皇

2 君かため春の野にいてゝわかたつむわか衣手に雪はふりつゝ

仁和の御門人にわかなたまふ時の哥なるへし

雪をはくるしみのかたにとり人に志をつくすのこゝ(十二才)
るなり此哥定家卿は有心躰の哥といへり

なを可有甚深所者歟

不知読人

3 梅か枝に鳴てうつろふうくひすのはね白妙にあは雪そふる

是は万葉の哥也羽しろたへにあはゆきとはうくひす

のうつもるゝ様にはあらずむめかえにうつりきてなく

うくひすのつはさに淡雪のうすゝとちりかゝり

たるさまの言語道断なる心をよめるなり

人丸

4 むめのはなそれとも見えす久かたのあまきる雪のなへてふれゝは

古今集には冬の部にいれり早梅の心なるへし

これも梅をふりうつむにはあらず雪の朝など(十二才)

空もしらみて雪とも梅ともわかぬさまなるへし

天をぎりてふるをあまきるといへり

5 人はいさ心もしらすふるさと花そむかしの香にほひける

此哥古今のこと書に初瀬にまつつることに

やとりければかのい糸のあるしかくさたかにやとりは

あるといひ出して待ければそこにたてりける梅の

花を折てとあり賞之久しく初瀬に詣てすして

又此宿へ行たるをあるし常にまつつへき人なれ

ともこのやとをうとみたるよとおもひてかくや

とりはかはらぬよしをいへるなり哥の心はあきらか也

人の心はしらすはなはむかしの香に匂ひけるとう(十三才)

たかはしさの下心也故郷とはつねにやとりつけたる

所なれはかくいへり

同

6 桜花さきにけらしな足引モイの山のかひよりみゆる白雲

心はかくれたる所なしいかにもしたてさはやかに

幽玄躰の哥なりしら雲の山のかひよりみゆる

とはさくらの咲たるよといはむため也

源俊頼朝臣

7 山さくら咲そめしより久堅の雲井にみゆる灌のしら糸
 心はさきそめてより満山花なるおりふしにみれば
 さなから雲井よりたきのおつるやうにみゆるなり
 もとより灌なれとも花ゆへに興をますこゝろ也(十三ウ)
 一首のうちのこと葉妙にして類かぎりなし

後鳥羽院御製

8 さくら咲遠山鳥のしたりおのなかくし日もあかぬ色哉
 人丸の山とりの尾のしたりおのといふをとれり心は
 花のさく比の遠景を興してなかき春の日も
 あかしと也又云俊成卿九十賀の時屏風の御歌なれば
 彼卿師範にまいられたりしによりて長久なるを
 悦給ふ御心なるへき歟

西行法師

9 をしなへて花の盛に成にけりやまのはことにかゝる白雲
 色々に了簡して読るもあるにひきかへてやすら
 かにそのまゝ読る事是西行の哥さまなり(十四オ)

ことからいかめしき哥なるへし

山辺赤人

10 百敷の大宮人はいとまあれやさくらかさしてけふもくらしつ

内裏の事をもらさすいへる五文字也心は大宮人は

朝家の奉公にいとまなきものなるか花をかさして

くらすは暇ありやといふこゝろなり

素性法師

11 いさけふは春の山へにましりななくれなはなけの花のかけかは

花をみてはるのやまへにましれは暮をも思はぬ心也

はなはひかりあれは日はくれぬとも花はあるへきの

心也此五文字はともなとをさそふこゝろなるへし又我

こゝろをもしさなふ心あるへし桜は七日かあいたに(十四ウ)

さきちるものなれはかくいへりなけは無の字の心なり

なけのけをすみてよむへし

不知読人

12 さくらから雨はふりきぬおなくはぬるとも花の陰にかくれむ

桜かりとは尋と云心侍りいつれもかるといふはみな尋る

かた也哥のさまおもしろくやさしき哥也ぬるともは
ぬるゝとも也縦ぬるゝともはなのかけをたのまむと
いへる心尤肝心也

小野小町

13 花の色はつつりにけりないたつらに我身よにふるなかめせしまに
此哥は表裏あり先春にいたりては見る人きと
思ふ花なりしを我身のよにふるひまなきまゝとか(十五才)
くうちまきれてとはぬ間に結句長雨さへふりて
花の色のうつろひぬるをうちなきてつつりに
けりなといへり下の心は小町は無双の美人なる
程に諸人の心をかけしなりそれによりて我も又
よをつらみ人をかこち朝は夕にうつるものおもひせし
まに我身のはななりしさかりもはや形おとるへて
いたつらに成ゆくを嘆く心也此花の色とは小町
か形のことなり人毎に尤此哥のこゝろを思ふへき
事とぞ

俊成卿

14 又やみむかた野のみのゝ桜かりはなの雪ちる春の明けほの

さくらかりは大かたおもしろかるへきに所はかたのゝ花の (十五ウ)

ちる折ふしの言語道断なるを興して又やみんと

いへるなりかた野とはかたきといふ秀句なりものと

いへるもかた野の事也花の雪ちるあけほのゝ詠を

いつわすれんとおもひかなしみ侍る心なるへし家隆卿

哥に又やみむまたやみさらん白露のとよめるを

為家卿は難せられしと也又やみむといふに又み

さらんはあるへきなり

紀友則

15 久かたのひかりのとけき春の日にしつこゝろなく花のちるらん

心は大かた風のさそふ花なりともいたうちらんは花に

うらみも有へきをましていはむ春の空はゆうくと

して鳥の音も霞木草の色ものとなる時節に (十六オ)

花ひとりいそかしけにちるを見ればはなのこゝろは

しつかにもなきよと限なくうらみしたひぬる心にや

猶此哥能々工夫すへきとそ師説侍し

後京極撰政太政大臣

16 明日よりは志賀の花そのまれにたにたれかとはむ春のふる里

これは三月尽の哥なりふりはてたるしかのふるさと

なれははなのさかりにこそ人もあまとひなとしけれ

花もちりはるもくれなはとふ人もあらしとなり

春のふるさとゝは春殿の故郷になす心也

持統天皇

17 春過て夏きにけらし白妙のころもほすてはまのかくやま

此帝女王にておはします也右哥ははる過て夏(十六ウ)

きにけらしといへる勿論にてよろしからさるやうに

しらする人は思ふへし此哥は更衣の哥なり其故は

天の香具山は高山にて春の間は霞深くおほひ

かくしてそれとも見へわかぬか春過ぬれはかすみも

たち散して夏の天に此山さたくと明白にみゆる

を白妙の衣ほすとはいへりほすは衣の縁なり

いかてか明白にみゆれはとて白妙のころもとはいふ

そといふ人あり春はかすみの衣におほはれたる山

そのかすみの衣をぬぎたる様なれば白妙の衣ほすとは
いへり霞のころをもつていへる詞なりされは春過
てといふも夏来にけらしといふもみな用に立て大切
の詞なり又四月をは清和の天といへは音余情有其(十七才)

へし此哥の新古今集の夏の巻頭に入は更衣の
哥の故也如此事誠に心中にこめて人にあらはず

へからすとそ侍し此哥をとりて定家卿大井河

かはらぬいせきをのれさへ夏きにけりと衣ほす也

此哥はいせきにかゝる浪を衣といへり此等にて

甚心得へしかく山のくの字清へし

俊頼朝臣

18 見わたせは浪のしからみかけてけり卯花さけるたまかはの里

これはたまかはの里といふに見わたせはとをける五文字

なり哥はきこえ侍り河辺の里に卯花さける時

節の様也したてさはやかに晴のうたのさま成

へし卯花を浪のしからみといへる也玉川のさと(十七ウ)

うのはなの名所也

19 五月雨はたくもの煙うちしめりしほたれまさるすまのうら人

俊成卿

さみたれの比藻しほ焼わひたる様誠にあはれに

不便なる躰也うちしめりとはもえかねてけふれるを

いへりされはすまのうら人はいとすかたもしほたれ

たる有様をいひのふる也五月雨はといふ詞は五月雨

の比はといふ詞也但又五月雨は日数ふれともわた

のへの大江のきしはひたさりけり此はとはつね

のは也多分比はと云なり

西行法師

20 道のへの清水なかるゝ柳かけしはしとてこそたちとまりつれ(十八才)

すゝしけなる木のもとなれはたちとまりしに暑気

をわするゝまゝ日をもくらしつる様の心なるへし

しはしもおもひつるものをといひ侍る心也たちとまり

つれと云本多分あり堯孝法印の自筆の

本にけれとありけれにてもこゝろおなししからは

ければまさるへきか

21をのつからすゝしくもあるか夏衣日も夕暮の雨の名残に

此五もし納涼を求ねとも自然雨後のすゝしき

さまなり有かのか文字は哉也衣に紐といふ事あれば

日も夕くれとつゝけ侍るにや

皇太后宮大夫俊成（十八ウ）

22いつとてもおしくやはあらぬとし月を御被にすつる夏の暮かな

光陰の過るをしたふ事は四時いつれもおなじかるへ

きに何とて御被には色々の物を流しすつる

そとなり猶年月をすつるといへり尤作者の

もの成へし

安貴王

23秋たちていく日もあらねこのねぬる朝けの風は袂すゝしも

このねぬるとは只ねぬる也哥のこゝろは秋の立より

ほとをもへすして只一夜のまにかほとまで朝気

のかせの袖にすゝしきよとおとろきてその

時節を理侍るにやこのねぬる朝けとはかならず

翌日の事をいふ成へし（十九才）

惠慶法師

24 八重律しけれる宿のさひしきに人こそみえね秋はきにけり

こと書に河原院にてあれたる宿に秋のくると

いふ心を人々よみけるにとあり此ことかきにて

心くもりなく侍り人こそみえねとはいにしへこのおとゝ

さかへ給し時世人のあふきし事はみな夢のやう

にて昔をわすれぬ秋のみ問来こゝろをあはれむ

により理たるさまたくひなくやよくく河原院

の昔をおもひつゝけて此哥をは見侍るへきとそ

貫之かとふ人もなきやとなれとくるはるは

八重律にもさはらさりけりと云哥にいくはくも

かはる事侍らす昔はかやうによみ侍るにや今は等類（十九ウ）

にて侍るへきか貫之か哥よりは猶あはれふかく侍る

にや

寂蓮法師

25 秋はきぬ年も半に過ぬとや萩吹かせのおとろかすらむ

秋くれはとしの半も過ぬると秋吹風におとるきて
ほとなの光陰やと身の向後を觀したる様にや

西行法師

26 あはれいかに草葉の霜のこほるらん秋かせたちぬ宮城のゝ原

心は明なり只此作の様の奇特なるうたなり宮

城野は露も風景もしけき所なれば都にかへり

てやこの秋風を聞て此ころの宮城野のあり

さまをおもひやりてよめり西行見し所なれば(二十才)

時節の景気を感じたるへし

大江千里

27 月見れば千々にものこそかなしけれ我身ひとつの秋はあらねと

大かた理明也月は陰の気なればうちなかむるに心すみ

あはれもすゝむ也されは千々に物こそ悲しけれといへり

下句は我身ひとつのうき秋のやうにおほゆる心を

いはむとて身一の秋にはあらねとゝいへるなり長明か

我身ひとつの嶺の松風も此心なり

撰政太政大臣

28 故郷のもとあらの小萩咲しよりよなく庭の月そうつろふ

是は月前草花といへる題也もとあらの小萩とは

ねもとあらくふときをいふ也故郷の秋のもの悲し(二十ウ)

きに萩のさきたるをまちえておもしるきと

おもふ時節に萩もやうくうつろひ月も有明

かたに成て又かなしきふるさとなるこゝろを

含てよめりよなく庭の月そうつろふと云にて

萩のうつろふ心をふくませり堯孝の筆跡には

故郷とは猶哥の心に叶へきかとなり

源俊頼朝臣

29 あすもこむ野ちの玉河萩こえて色なる浪に月やとりけり

近江国の名所なり萩をよめる所なり萩の下枝に

月もうつろひ浪もこゆるはかりに色のうつろへるを

かく読なし侍にや萩こえては浪の事なり

かならずしもはきをほこえすとも所からなれはかく(二十一オ)

いへり色なる浪に月のやとりたる興に乗して

あかぬ心よりあすもこむといへり

家隆朝臣

30 なかめつゝ思ふもさひし久堅の月のみやこの明方のそら

こゝにてもくうてんろつかくの朝はさひしくみゆる

ものなりそのこゝろをもつて夜もすから月をみる

に明かたの月のさひしきを見て月宮殿まで

もおもひやりたるこゝろなり

後鳥羽院

31 秋の露やたもとにいたく結らん長き夜あかすやとる月哉

あきのよの月を御らんするに感思になやまさるゝ

心よりおほえすものかなしきまゝ袖の涙にやとれる (二十一ウ)

月のさまなり長夜あかすとは終夜の心なるへし

無限秀哥とぞ

不知読人

32 鳴わたる鷹のなみたやおちつらんもの思ふやとの萩の上のつゆ

物思ふやとゝは大かたもかなしかるへきに萩のつへの

露をつちなかめたる折ふし鷹の鳴てゆくを聞て

此萩の露のかなしきさまはよのつねのつゆには

あらず鴈の涙をおとすらんと也感情ふかき哥也
 鳴といふに付て泪のさは待る也是つたのよせぬ也
 玄妙不可説の哥に待るとそ

同

33 秋か花ちるらん小野の露霜にぬれてをゆかむさよは更とも (二十二才)
 ぬれてをゆかむとは秋に乗して野遊などの
 こゝろか又は恋などの心も下にあるか只哥は何もす
 かたを能々工夫すへき事とそ人丸の哥也

天智天皇

34 秋の田のかりほの庵の苫をあらみ我ころも手は露にぬれつゝ
 苺穂の庵例の重詞也さて歌の心はあきの田の
 庵の其時すきて秋も末になりゆき苦なともくち
 はてゝ露をふせく事もなきまゝ露のたふくと
 をきあまりたることく我そてのぬるゝよし也其故は
 王道の御述懐の御哥也此君九州におはします
 時よをおそれ給て苺萱の関をすへ往来の人を
 名のらせて通したまふことあり天子の御身 (二十二才)

にて御用心ある御事は王道もはやとき過る
 にやと思召御心也時過たるかりほの庵にて覚悟
 すへきとそ猶尋ぬへし此哥は上代の風也上古は
 心たに能おもひ入れは詞は巨細になきおほかるへし
 能々余情を思ふへき事とそかりほと穂^本といふ説
 あれともたゞかりをとよむへし

文屋朝康

35 しら露に風の吹しく秋の野はつらぬきとめぬ玉ぞ散ける
 吹しくとはしきりにふくあらき風也つらぬきとめ
 ぬ玉とはたまをは糸にてつらぬくことありそれを
 ぬきみたしたるかといへる心也その心は秋の野の所
 せきまでをきみちたる朝の露のおもしろきに(二十三才)
 俄なるかせのあらくくと吹たるにをもきはかりなる
 草の露はらくちりみたれたる当意をもかく
 よめり能々その景気をこゝろにふかくこめて見
 侍るへき哥なりとそ

藤原清輔朝臣

36 たつた姫かさしの玉のをよはみみたれにけりとみゆるしら露

是は露のをきみたれたる様を感じていへりたつ

田ひめは秋の季を司とる神なれば其かさしといへり

姫といふにかさしの玉とはつかはせたり此哥はたゝ

露一のことをか様にいひたてたるそ尤作者のもの

なるへし

西行法師(二十三ウ)

37 白雲をつはさにかけて行かりの門田の面の友したふ也^本

冷しきあきのそらにしら雲のかせにふかれたる

折ふし雲井はるかに飛鷹も門田の友をしたひ

て落るやうみるやうなる哥なり

不知読人

38 あき風にさそはれわたるかりかねはものおもふ人のやとをよかなん

秋は愁の比なれはいとくしく物思ふ宿の秋かせに

さそはれて鷹鳴わたるを聞はいま一しほおもひも

まさりかなしければそのあたりをよきてとをれと

云なり物思ふ人とは我事なるへし

式子内親王

39 千度つつ砧の音に夢覺てものおもふ袖の露そくたくる（二十四才）

哥の心はいつも愁人の袖は涙ひまもなし然に

砧秋のあはれをもよほしかほに大かたならず幾千

度ともなきに夢うちおとろきね覺のとは思の

あるにきそへてこゝろをくたく露の袂よとつちな

けく事理過て覺る也五もしよりしてくたくると

いふまでつよくしてしかもおもしろきうたなり礎は

恋に縁あるものなれはつつ人も誰をか待なと聞て

読る心尤其感あり

大式三位

40 はるかなるもろこしまてもゆくものは秋のねさめの心なりけり

秋の夜のねさめに種々のおもひを心にもちて

それをはいひ出さすしてかく読る事がきりなき（二十四才）

ことわざにや

大納言経信

41 夕されは門田の稲葉をとつれてあしの丸屋に秋風そ吹

此哥は田家秋風といふ事を讀り芦の丸屋とは

さなから蘆はかりにて作れるを云也其門田の稲はに

たくれの秋風そよくとをとつれてきともあへず

やかて芦の丸屋に吹たるさまさひしき哥なり

此夕されは夕暮におなし但風情をもつこころ

あり毎夕の心あるへきにやいかにも数篇吟味

すへき哥なりとぞ

寂蓮法師

42 さひしさはその色としもなかりけり槇たつ山のおきのたくれ(二十五才)

槇たつ山といはむとて其色としとはいへりその色

とは紅葉の事也槇立山の秋のたくれはうつろへる

木葉を見るよりも猶さひしきとや

式子内親王

43 それなからむかしにもあらぬ秋風にいとくななめをしつのをたまき

あき風は昔もいまもそれなから我身ひとつに愁の

あるゆへにあらぬ様に覺ると也月花も平人は

見るにものつからす愁人はみるに歎の色あるへしいとく

なかめをとほよはひもふりつらきのみにて昔のみ
恋しくおもひて此秋風を聞になくさむ事なれば
むかしの秋風にはあらず昔は今にかへりてもとな
くさみしあきかせにあはゝやと也昔をいまに(二十五ウ)
なすよしもかなの古歌の心を末にいひのこしたる
なりまことにたへなる事也あなかしことや申侍らむ

文屋康秀

44 吹からに秋の草木のしほるれはむへ山風をあらしといふらん

此哥は古今にも詞たくみなるにいへる心は明なり

山風を嵐といふに付て文字の義を云は当流に

不用之たゝ山風はあらしものなれはあらしといふと

いへり吹からにとは則の心也

人丸

45 さをしかの妻とふ山の岡へなるわさ田はからし霜はをくとも

岡への田面に鹿のなくを聞て霜をくまでも

からし鹿をかよはせむと也色付る稲はに鹿の(二十六オ)

鳴たるをきかむさま面白もあはれにも侍るへき也

其を人丸の心に感して読るなるへし吟
味たゝならず誠殊勝なる哥とぞ

不知読人

46 おく山に紅葉ふみわけなく鹿の声きく時そ秋は悲しき
此哥興山にといへる所尤以肝要也秋ふかくなり
行ては山ともあらはなる比深山のかけをたのみて
鹿は有物也哥の心はいかにも秋ふかくなりはてゝ
深山のもみちのちりしけるをふみわけてしかのう
ちわひなく比の秋いたりてかなしき心也此秋は
世間の秋なりこゑきく人に限へからすされは
余情かきりなきにや侍らん此哥はいつれの先達の(二十六ウ)
儀にか侍けむ月やあらぬほとこの哥にこそと
いはれけるとぞ

菅家

47 秋かせの吹上にたてる白菊は花かあらぬか浪のよするか

吹上紀伊国名所也菊を読む所なり心は先

秋風の吹上にたてるといひて此白妙にさくは

きくのはなにてあるか又波のよすると興をさかせて
 読る也如此そのけうをいひたつる事尤可為肝
 要也

凡河内躬恒

48 心あてにおらはやおらん初霜のをきまとはせるしら菊のはな

おらはやおらむとは重詞也何もあらまし事也(二十七才)

心はしら菊のおもしろきさかりは類なくおほゆるに

初霜のいたつふりたる朝なとうちなかむれは一入

あはれと思ふよし也霜をも菊をもならへてあひ

したる哥なるへし

貫之

49 白露も時雨もいたくもる山は下葉のこらす色付にけり

近江の守山と云を行とて読ると也心は時雨はうへ

よりいたつふり露は下葉よりのほるものなれは

染のこさぬと也此露しくれは連々の義也

人丸

50 たつた河もみち葉なかる神なひのみむろの山に時雨降らし

たつ田神なひ御むる此三は立田河の水上也(二十七ウ)
このしくれも只今の時雨にあらす紅葉散そめ
しよりの時雨なり

読入しらす

51秋はきぬ紅葉は宿にふりしきぬ道ふみ分てとふ人もなし
あきはきぬとは初秋にあらすつきぬる也上略の詞
なり心は秋は暮紅葉はちりしく宿ともとふ人あら
はなくさむへきをとおもふこゝろをいひあらはさぬ
こゝろこの哥の感なるへし能々可味之

業平

52ちはやふる神代もきかす立田河からくれなゐに水くゝるとは
秋くれ又は神無月はかりなとに立田河のなかれも
なきまでちりしけるもみちに水は紅をくゝるやう(二十八オ)
なる興を神代にもかゝる事は聞及はずと也業平
の哥は多分心あまりて詞たらぬをこれはこゝろ
詞かけたる所なければ大切なりとぞ

春道列樹

53 山河に風のかけたるしからみはなかれもやらぬもみちなりけり

此哥は志賀の山こえにて読る也心は山河に落葉

ひまもなく降みたれてなかれもせきかへすはかりを

興して風のかけたるしからみそと先いひなして

下句にてかくみゆるしからみはなかれもあへぬ紅葉

なりと理れる也なかれもあへぬとはさらにひまも

なくおつる木葉をいへる也その心は只山と河との

眺望なるへし風のかけたるしからみ誠はしめて(二十八ウ)

いひ出したる妙義なりとぞ

源信明

54 ほのくくと有明の月の月影に紅葉吹おろす山おろしのかせ

これは月も有明になり次第々に影つすく梢のはも

すくなく風の音さへものすこくなりゆく秋のなこり

言語道断の景気を能々思ふへし

太上天皇

55 ぶかみとりあらそひかねていかならんまなく時雨のふるの神杉

時雨は染んとする杉はぶかみとりにてつねなけれは

さらにあらずふ様にみゆる梢の気色を興し
てよめる哥なり

西行法師（二十九才）

56 あきしのや外山の里やしくるらん伊駒のたけに雲のかゝれる

あきしのは河内大和イの名所也いこまのあたりなるに

よつて嶽に雲のかゝりて時雨る気色言語道

断其興有へし殊に雲のかゝれるといへる様だけ

あり無比類哥とぞ

清輔朝臣

57 冬かれの森の朽葉の霜の上に落たる月の影のさやけさ

落たる月とは朽葉の霜の上に影すみやかに

うつれるさまなり入月にあらずさむくさひたる

哥なりとぞ

同

58 君こすはひとりやねなむ篠のはのみ山もそよにさやく霜夜を（二十九ウ）

人丸石見国よりのほるとて篠のはゝみ山もそよに

さやく也我は妹思ふ別きぬれはまつ此つたの

心は篠のはゝ風にこなたかなたへなひきやすきもの
なるを我はそれにかはりて一すちに妹を思ふとなり

この哥をとりて読る深山の恋などのこゝろ也
悲しき哥なるへし右同卿の哥なり

撰政大政大臣

59かた敷の袖の氷もむすほゝれとけてねぬよの夢そみしかき

かたしきとはさむき夜にひとりいねたる様なり

氷とは涙もおもひむすほゝれ打とけてねぬよを

みしかき夢といふ也あはれなる哥也

人麿(三十才)

60やたの野ゝあさ地色つくあらち山嶺の淡雪寒くそ有らし

矢田野あらち山越前の名所也高山にて秋より

雪のふる所也されとも矢田野ゝ浅茅は色付に

あらち山には寒雪のふると也哥のさまからひたる也

よみ人しらす

61故郷は吉野ゝ山しちかければひとひもみ雪ふらぬ日はなし

よし野は皇居の在所なれば古郷といへりいつくはあれと

この故郷はと云やうに心得へしさひしくあはれなる
哥のさまなり

同

62 今よりはつきてふらなん我宿の薄をしなみふれるしら雪

此なむは下知なりつきては打続てなりをしなみは(三十ウ)

をしなひかしたるさまなりされともふかき雪にあらす

すゝきのうへにつすくと雪のうちなひかしたる

さまおもしろければ又かやうにつきてふれといへる也

坂上是則

63 朝ほらけ有明の月と見るまでによしのゝ里にふれるしら雪

此哥は彼里の時の眺望と見侍るへき也里にふれ

る白雪とはうす雪に侍成へし有明の月と

いへるに能かなへり心を付て見侍るへき者也

後京極

64 石上ふる野ゝ小篠霜をへて一夜はかりにのこる年かな

此哥は歳暮の哥なり初霜の比より連々の心

をそへて見侍るへきなり(三十一才)

65 君か代はつきしとそ思ふ神風やみもすそ河のすまむ限は

経信

幾万代ともかきりなき君の御代也みもすそ河の

なかれ是もつきすすまむなかれなりと也天照大

神の御末なれはいへり祝言の哥はおもしろきは

まれなるに是は長たかく清らかに勝たる名哥

なるへし

僧正遍昭

66 末の露もとの雫やよの中のをくれさきたつためしなるらん

是は哀傷の哥なり末葉の露とおもへは又落て

もとの雫となりたる様をくれさきたつ世にたとへ

たるへし此哥新古今に入を後京極殿定家卿(三十一ウ)

古今に入さるとおもふ今まで残たるよと申されし

とき一昨日有家も来てさやつに申されしと也

同

67 みな人は花の衣に成ぬなり苔のたもとよかはきたにせよ

此哥蔵人頭良岑の宗貞とて深草の御門に

奉公せし臣家なりしか御門にをくれ奉てのち
 更世も住うしとてひ糸の山にのほり遁世して
 僧正遍照といひしか御いみ過て皆人御服ぬき
 て或はかうふり給はりなとよるこふをきゝてよ
 める也猶かはきたにせよと云にて御わかれを
 ふかくなけく心見えたり

和泉式部(三十二才)

68もろともに苔の下には朽ちすしてうつもれぬ名をみるそ悲しき

小式部身まかりける後衣裳の紋に花に露

置たるを上東門院よりとし本にたひてくたされ

ける時それを見てよめるなり名をみるそかな

しきと云尤あはれふかし

道信

69限あれはけふぬきすてつ藤衣はてなきものは涙なりけり

はてなきとは一廻をははてと云也是はいみあき

て服衣をはぬける涙は猶かきりなき心なり

後鳥羽院

70 おもひいつる折たく柴の夕煙むせふもうれしわすれかたみに

此歌は慈鎮和尚の母のうせ給ひし時あそはされ(三十二ウ)

ける御製也天子の御身にて臣家の人の母まで

をあはれみ給ふ御心かたしけなき御事也哀傷哥

にうれしきなと云詞引かへめつらしく侍るなり

それは其人ゆへつらからぬと也わすれかたみは忘

かたきなり御返哥あり

同

71 なき人のかたみの雲やしほるらん夕の雨に色はみえねと

雨中無常と云ころ也其人故千万かつの涙の

そてをなき人あはれとおもひかたみの雲とはなれ

るかとなり夕の雨ものあはれなるにうち詠は何とは

子細は見えねともかはかりあはれにかなしきはかたみの

雲こそしほるらめと也しくるらんと云本も在可尋之(三十三オ)

中納言行平

72 たちわかれないなほの山の峯に生るまつとしきは今かへりこむ

此歌俊成卿云余にくさり過てよろしからず

侍るを今かへりこむといひなかしたるそ尤幽玄なると
 その心は明なりなをまつ人たにあらはやかて歸こむと
 なり待人あらしと思ふ心をいへる由也

貫之

73 白雲の八重にかさなるをちにても思はむ人にこゝろへたつな

これは旅たつ人に読て送る此人にと云は我身
 なからそなたのたれにてもあれ思はむ人にこゝろ
 隔なといへる所尤作者の勲功也八重にかさなるとは
 かきりなく遠く隔行心也又相思中をは雲も(三十三ウ)
 へたつなとその人ゆへにこゝろなき雲に對し
 ていひこし一義なり

行平

74 わくらははにとふ人あらはすまの浦にもしほたれつゝわふとこたへよ

此哥は行平すまのうらへ左遷のときよめりわくら
 はとはまねなるこゝろなり此五文字肝要なり
 其故は多いりよにそむきたれはたれもとはし
 もしとふことあらはかくこたへよと也あはれふかくや

侍らむ

菅家

75このたひはぬさもとりあへず手向山紅葉のにしき神のまにく

是は宇多御門奈良へ行幸の御時供奉したて(三十四才)

まつりて読給ふ也此たひは旅字と云義あり

その心もたかふへからすといへとも猶度字のこころ

よく侍へきとそされは山のもみちをそのまゝ神に

まかせて手向をなす心なり君につかふるみちに

より私をかへりみぬこころ尤殊勝也手向山南都に

あり又相坂をも云なり

俊成卿

76難波人あし火焼やに宿かりてすゝろに袖のしほたるゝかな

あし火たくあま人の家に旅ねしてあはれ

なるさまをかく読る也すゝろとは心ならずよその

事まであはれに思入りてぬるゝ袖なるをいふこころ也

すゝは声の縁語なれはいへるなりたゝはそゝろと(三十四才)

いふへし

77 たちかへり又もきてみむ松島や小嶋のとまや浪にあらすな

同

小島のとまやの面白ければ興に乗して又も

きてみむと也あはれにも面白もある哥なり

浪にといへるに文字殊勝なると也

家隆卿

78 明は又こゆへき山のみねなれやそらく月の果のしら雲

旅ねの月の行末なり明て我越ぬへき高山かなと

旅行を打侘びて読りかくれたる所なし

俊頼朝臣

79 難波江のもにつつもるゝ玉かしはあらはれてたに人を恋はや(三十五才)

恋は忍を道とするに顕てたにといへるこゝろ尤

切なる恋にや又この玉かしとは石の事也人を

恋るみの有時少石を海に入るにうきあかれはかなふ

しつめはかなはぬ也もにつつもれすつきてあらはるゝ

やうに恋はやとねかふ理侍るにや

後京極

80 もらすなよ雲井ある峯のはつ時雨木の葉は下に色かはるとも

わか思は切なれとももらすなと也初時雨の初恋のこゝ

ろなり木葉に我心をよそへていへるなり心の色は

かはるとも色みえぬものなれば袖の涙とはなさしと

なり

不知読人(三十五ウ)

81 東路の佐野の舟はしかけてのみ思ひわたるを知人のなき

かけてといはむための序なりかくおもひわたるを

しらぬとなけく心也思わたるとは久しきこゝろなり

人にあはむと思ふをしらぬとなけくなり先面白を

取出て読事惣て其歌の力也

参議等

82 浅茅生の小野のしのはら忍ふれとあまりてなとか人の恋しき

是も忍といはむ序也忍へともく余ての心也尤恋の

本意たるへしあまりてなとかに能々心を付へし

定家卿なをさりの小野あさちにをく露も草葉に

あまる秋の夕暮も此哥をとれる也

83 いかにせむむろの八島に宿もかな恋の煙をそらにまかへむ

此五文字いたりて切なる時思案し出して云こゝる也

室の八島は野中より常に煙のたつ所なれば思ひの

けふりのよそにもるゝを此しまをやとにしてわか

けふりをまかへんと也ねかふこゝる也恋といふも

おもひといふもおなし心也

よみ人しらす

84 夕されは雲のはたてにものそ思ふあまつ空なる人をこふとて

雲のはたてとは夕の雲に旗の手の横になひ

きたる雲を云也其ことく思ひみたるゝと也

伊勢

85 なにはかたみしかき蘆のふしのまもあはて此よをすくしてよとや (三十六ウ)

この難波かたとは大様に云出たる所也五もしに君臣の

五文字あり是は君のすかた也ひしといひつめて

詮となるもあり能々分別すへし歌の心はおもひ

そめしよりこのかた人にも縁を求詞をもつくし

こゝろをも碎あるはたのめて過しあるは又かけ
 はなれずして年月をかさぬればさてもいかゞは
 せむなとおもひあまりたるうへにうちなきていひ
 出したる歌也みしかきあしのふしのまもとはいさゞ
 かははかりもと云心也かやうのうたを大方に見侍
 らむは口惜とそ一首の姿吟味殊勝なる哥成へし

俊頼

86 うかりける人をはつせの山おろしよはけしかれとはいのらぬものを (三十七才)

此哥は祈不逢恋と云題にてよめり初瀬に

恋を祈事住吉物語みえたりは泊瀬は山中にて

風はげしき所なりその心はつかりける人をはし

かれとはいのらぬ物をと云る心也初せのやまおろしは

はけしきの枕詞也いのれともく人のこゝろは

はけしければたゞはけしかれと祈りたるやうなれば

それをかくはけしかれといのらぬものをといへり

定家卿の云近代秀哥にこのうたをこゝろ

ふかくこと葉こゝろにまかせて学ともいひつゝけ

られかたく誠に及ましきすかたなりといへり

崇徳院

87せをはやみ岩にせかるゝ瀧河のわれても末にあはむとぞ思ふ(三十七ウ)

心は岩にせかるゝ水はわかれても末にあふものなり

つらき人にわかれて後はあひかたき物なるをわり

なふも末にあはむと思ふははかなき事そとうち

なけきおもひかへしていへる也われてもは別をわ

りなきとを兼云也

伊勢

88おもひ河絶ずなかるゝ水のあはのうたかた人にあはて消めや

此歌の心二あり一には仲平と云男の有し伊せ

死たると聞しといへりければかく読るといへり今一には

しはしも人にあはて消むものはと云心也うたかたは

水のあはのことなからいかてかなといふ詞也又暫もと

云こゝろもありうたかた人とひ文字をすむなり(三十八オ)

うたかたといひきりて又人といふへし

人丸

89 無名のみたつの市とはさはけともいさまた人をうるよしもなし

市はさはかき物なりそのことくわか名はたちさは

けとも人にはあはぬ心也うるよしもなくはわか

物にならぬ心也又市の縁語也

不知読人

90 かた糸をこなたかなたによりかけてあはすは何を玉のをにせむ

こなたかなたととやせましかくやせましなとおもひ

めくらしてあはすは何を命にせむとなり

俊頼朝臣

91 おもひ草葉末にむすぶ白露のたま〜きては手にもたまらず(三十八ウ)

たま〜といはむ序也たまさかに待えたる人の

やかてたちかへりなとするをうちなきて読

る也心は明なり

俊成卿

92 思ひきやしちのはしきかきつめて百夜もおおなしまろねせんとは

此哥臨期変約恋と云題也心明也百夜めに

男の親死て不逢古事あり又鳴の羽かきとも

一説也

壬生忠岑

93 在明のつれなく見えし別よりあかつきはかりうきものはなし

この哥あはすして帰心をよめり有明は久しく

残物なれはつれなきと云待り此つれなくみゆるは(三十九才)

人の事なり心は終夜心をつくしていかてあはんと

思に人はつれなくてはてぬれはいかゝせむと

立別る比有明の月のあはれもふかきを詠つゝ

かへるさまなりたとひあふよの帰さなりともかゝる

そらはかなしきかるへし結句あはて別を思ひ侘て

今夜の暁はかり世にうきことはあらしと思ふよし也

古今に何の哥かすくれたると後鳥羽院定家

家隆に尋たまひけるにいつれもこの哥を

申されけるとそいひつたへ侍る定家はあはれこれ

ほとこの哥一首よみて此世のおもひ出にせはやと

のたまひしと也

不知読人(三十九ウ)

94 名取川せゝの埋木あらはれはいかにせむとかあひ見そめけむ

人もゆるさぬ事を思外になれそめておもひつゝ

くれはいかにせむとてかあひみそめけむと世のつゝ

ましさせむかたなきを歎けるにこそ侍らめと

僻案抄に書給ひしをそのまゝうつし置所也

返々殊勝の歌なるへし

素性法師

95 今こむといひしはかりに長月の有明の月を待いてつる哉

有明の月を待いてつる心一夜の義にあらずと

定家卿注にも侍と云々たのめて月々を送行に

ときしも秋さへはや長月の空に成行こゝろを

よく思入て吟味すへき哥なり(四十才)

元良親王

96 あふ事はとを山すりのかり衣きてはかひなきねをのみそなく

序歌也山とりはあふ事まれなる鳥といへり山すり

衣といふ事に取なせりきてはといはむため也音を

なきてあふ事まれに侍にや

97 あし曳きの山鳥の尾のしだりおのなかくしよを独かもねむ

人丸

此哥異義なし只あし曳とうち出たるより山鳥

のおのしたり尾のなかくしといへるさまいかほとも

かきりなき夜のなかさなり詞のつゝき妙にして

風情尤長高しかゝる哥をは能々眼をつけ

数返吟して其味をこゝろみ侍へし無上至極の(四十ウ)

歌にや侍らむ人丸の哥は心を本としたるとそ

詞景氣をのつからそなはれる事は天然の歌仙の

徳也古今の間に独歩すといへるこのことはりにや

元良親王

98 わひぬれはいまはたおなしなにはなるみをつくしてもあはむとぞ思ふ

是は宇多の御門の御時京極御息所へしのひて

かよひけるをあらはれて後又つかはしたる哥也

侘ぬれはとはよろつのおもひつもりてせむかた

なき時いへる詞也されは今はまだあはずとも一たひ

たちにし名はおなし名にこそあれみをつくし

ても猶あはむとそ思ふといへるみをつくしは難波の
 縁もおなしなにはとは名とつゝけたる詞也幽玄(四十一才)
 躰の哥とそ歌はたゝ心は云に及はず詠して
 善悪をしらるへき様をよくく吟味すへき
 事にこそ

天台慈円

99我恋は庭のむらはきうらかれて人をも身をも秋の夕暮

此哥種々の義あるよし承及ぬ万葉の哥を
 とりて読り本哥は我せこをわれまちをれは
 我宿の草さへおもひうら枯にけりさて萩を
 読事は万葉よりこのかた萩は恋に縁あるもの也
 心はつれなき人を待て其人を思ふに時もやうく
 秋になりてに庭の萩もさく時分はさりともとつち
 たのむに花もはやうつろひはてゝ猶うらかれの(四十一ウ)
 折ふし今はゝやとはれもせし人の心ほとつらめしき
 物はなしと人をも恨身をも休する心也

後鳥羽院

100 袖の露もあらぬ色にそ消かへるうつれはかはる歎せしまに

被忘恋の心をよめり心は境に転せあるゝ物にや思ひ

そめしはかりの時は常の涙にて人のうつりかはる

にしたかひてわか思ひもあらぬ恨となり涙の色までも

紅になる事の肝心にてこそ侍れきえかへるとはもとの

露は消て又をく心なるへし

不知読人

101 おもひ出るときはの山のいはつゝしいはねはこそあれ恋しき物を

例の序哥也心は明也一度休して程へたる事な(四十二才)

れはいひ出ぬはかりにてこそあれ思ひ出る時は恋しさ

せむかたなきものとなりとなけくよし也

元輔

102 契りきなかたみに袖をしほりつゝ末のまつ山浪こさしとは

ことかきに心かはりて侍ける女にかはりてとあり

心はさてもかくあたにかはるものをたかひに袖をしほりて

浪こさしと契りけるよなと少恥しむるやうに云る心也かはる

をは中々恨ずして契りしをなけくこゝろ也

103 なげゝとて月やは物を思はするかこちかほなるわか涙かな

月前恋の心也終夜月にむかひて打詠るに

ものかなしくて月の我心をいたましむるやとつら(四十二ウ)

めしきをおもひかへしてかくいへり少平懐の

躰なりこれ西行の風骨也さらにつくるふ

所なきは上手の業なるへし(四十三オ)

宗紙注云々此式冊以大覚寺准后御秘本写加校舎也

畢最可謂后代之証本焉卒

莫許外覽而已

藤孝(四十三ウ)

(四十四オ空白)

這一冊借賜

法皇御本遂書写校合畢

享保十六年三月 権大納言光栄(四十四ウ)

詠歌大概抄

詠歌之大概

情以新為先求人未詠詞以古可用詞不可出三代集先達之所用新古

今古人歌同可用之風躰可做堪能先達之秀歌不論古今遠近見宜哥可做其躰

近代之人所詠出之心詞雖一句謹可除棄七八十年以

來之人哥所詠出之詞努々不可取用之於古人歌者多以其同詞詠之已

為流例但取古歌詠新歌事五句中及三句者

頗過分無珍氣二句之上三四字免之猶案之以

同事詠古歌詞頗無念歟以花詠花以月詠月以四季哥

詠恋雜哥以恋雜哥詠四季歌如此之時無(一才)

取古歌之難歟

あしひきの山郭公 みよしのゝよしのゝ山

久かたの月のかつら ほとゝきすなくやさつき

玉ほこのみち行人

如此事全雖何度不憚之

年のうちに春はきにけり 月やあらぬ春やむかし
さくら散木のしたかせ ほのゝとあかしの浦

如此之類雖二句更不可詠之

常觀念古歌景氣可染心殊可見習者古今(二ウ)

伊勢物語後撰拾遺三十六人集之内殊上手歌

可掛懸人丸・實之・忠雖非倭歌之先達時節

之景氣世間之盛衰為知物由白氏文集第一

第二帙常可握深通和歌

倭歌無師匠只以旧哥為師染心於古風

習詞於先達者誰人不詠之哉(二才)

(二丁ウ空白)

詠哥之大概

大概大略大方同事也一説云此一冊後鳥羽院御子槐井宮
轉快親王定家へ哥讀やを如何と被書云々其時被書進物也但御
哥若年之不審トアル事ナレ共若年ヨリ御尋ノ事七連綿ノ事也

此書を詠歌大概と号する事其理あらはなり

いへと大概といへるその程はかりかたくや大方と云

におなしゃつには侍れと猶又さしてわきまへかたき

者也たとへは世俗に十の物七八なといふ事あり

それになすらへて心得へきや侍らむ心は大綱網

目の儀也綱の目は数をしらぬものといへと大綱の

一すちをひけはみなそれにしたかふかことく家々の

をしへ心々の故実書をけるもの数をしらすとい

へとも此一冊の下にこもれるなるへし猶雖有

種々儀所令省略也

情以新為先求人未詠之此心といふに情の字をかける(三才)

(一)詠八歌之詠

吟也詩八言

志ヲ知歌水言

詠歌両字同

在レ心為レ志出レ口

為レ詩

經レ二八歌詠諸如来

トアリ

記レ一事詠一物

詠八木歌八柯

史記云

大概小概ヲ蓋ト

読也ソレライヘハ

大略大抵也

同也蓋八凡ト

云心也(頭注(三オ)

事其儀甚深也心と云に心意識とて三の

心あり心のこゝろは更にはたらかぬ心なり意の

こゝろは少分別するこゝろ也識のこゝろは物をくはし

く了知するこゝろ也情の字は識の心也歌をよむ時は

心を天地にめぐらし性を草木禽獸になすらぶる

ものなれは情の字をかく事面白也其上に此書に

かきらす定家卿の物を作し給へるには古今集

をもととして道をたて給也古今集に・やまと

歌は人の心をたねとしてとかける心はうこかぬ

心なり・みるものきくものにつけていひ出せるなりと

いふところ此情の字に叶へり仍此字を書給なりとそ

さて情以新為先といへる下の小書に求人未詠（三ウ）

（情新トイヘトモ

サノミ新事モ有

カタケレハ詞ヲハ

不改性ヲ又キカフル

ヤウニスルト云々

連歌ナトニモ專

ノ事也タトヘハ

十住心院心敬

僧都連歌云

ニたひは人とならしと

思ふ世ニト云句ニ

タ、月ニメテ花ニ

クラサント付ラレ

タリ前句ハ六道

輪廻ヲ悲テ又不生

ヤウニト也人生ウケ

カタケレハ生逢タル時
 月ニメテ花ニクラサン
 ト也如此心ヲ又キカフ
 ルヲ情新コトトモ
 云ヘキニヤ

伊勢物語（頭注（三ウ））

之心詠之といへる此詞誠道の肝心也此心なくは
 いかてか作意といふ事侍へからむいかにもみちなき
 所にむかへて道をもとめおよはぬ堺にのそみてあ
 たらしくよまむと心をかくへきなり但又此下に
 先達見るによろしくと云詞をくはへていへり学者
 可思慮此旨者也其故は人のいまたよまさる
 心をもとめよと云に二の心侍るへきなり先むかし
 よりかゝる作意なしと人のおとろくところ又常
 に人のよみならはしあるは又目にもかゝらぬ
 ふるめきはてたる心詞を少引かへてあらぬものに

しなす事堪能のおもふ所也たとへは古今の歌
いつはとは時はわかねと秋の夜そものおもふことの(四才)

(春日野ノ若紫ノ)

スリ衣忍ふの乱

カキリシラレス

此返し

ミチノクノ忍ふもち

すりタレゆへにみたれ

そめにしわれ

ならなくに

此哥モ河原左大臣ハ

誰ゆへにミタレソメ

ニシ君ゆへにこそ

乱ぬれと也

ソレヲ用カヘテ誰故ノ

思ニテカアルラン我

ユヘニテハアラシト也

源氏玉鬘ノ卷二モ

君にもし心たかは、

の心ヲ用カユルコト

アル也心ヲアタラシク

シナシタル也

可秘々々(頭注(四才)

かきりなりけると侍るを定家卿いつはとはわかぬとき

はの山人もそらにおとろく月の影哉なといひかへ

わかやとのむめのたち枝や見えつらん思ひの外に君か

きませるをとへかしなたちえはむめの見えすとも

にほひをこめて立つ霞かほと引かへたるは誠に

あたらしくこそ侍れ如此のたくひかきりなくこそ

いづれも作者のおもふへき所也

詞以旧可用といへる下に詞不可出三代集とあり又

新古今古人哥同可用云々三代集哥にも

ことはあしからむは不足用之又三代集詞ならね

と読出たるいくらも侍る也但是は學者にあし

き詞を除へきのいましめ也・新古今故人哥(四ウ)

(一為家ハ心フルク

トモ詞ツ、キノ聞

ヨク艶ニアランヲ

一休(マ)トイヘリ

俊成卿オナシク

心ハアリト云詞ヲ

カサラヌハアシキ

トナリ) 頭注(四ウ)

同可用之と侍るは三代集に准たる詞の心なり

返々三代集を出へからすといへるは作意の思入所

心のきはもなきまゝにいかにそや成行を詞のたゝ

しくきよらなるをもつて作たつれば心もけた

かく成てしかもあたらしく又感深きもの也世上

の人の上にも詞つかひにて其人の心優にも賤くも

なれるもの也定家卿の読方の口伝に心は新詞は

ふるく心は直く詞は艶にといへり心の直く侍らんに

詞艶ならずは歌さまみくるしく侍へしとそ

風躰可憫堪能先達之秀歌

此下の小書に不論古今遠近見宜哥働其

躰といへり秀哥と云は歌にとりて無上の事也(五才)

(一) 崇尊親王哥ノ

事

為家へ尋ラレシ

時風躰アシク

マシマス程ニ御身

ヲツゝシマレヨト申サ

レシ也其後御哥

アソハシテ思召

シラレシト也

花中求_レ花

玉中探_レ玉

歌人可思

詞也

月ヤアラ又春ヤムカシ
結ふ手ノ雲にこる

おしからぬ深山風の

さむしろになにと

いのちのいくよ

ひとりね（頭注（五才）

是第一の難儀たるによりくはしく書給へる也
其故は堪能の先達ならぬも秀歌をよみいつる
事はあれともそれは本とするにたらず又堪能先
達なれはとて毎度秀歌は侍らぬものなれは
堪能の先達の秀哥にならふへしといへり大切
の教也古今遠近を論せずよろしき歌をみてと
いへるは上中今に渡へき心也其意趣奥の百余
首にみえ侍り返々歌は風躰第一の事也とそ
よみいつる哥の風躰あしければ其身よろし
からぬ事ありといへりいかなるを風躰のあしきと

いふへきならば雨中吟十七首也雨中吟と号す
 る事習ありとそ其歌の中にまたれゆく(五ウ)
 光もをそき月よりも雨に聞ゆる菝の音哉うち
 しめり薄のつれ葉をもりつゝにしふくかせになひく
 むら雨星もなく雲まも見えぬ雨の夜に猶また
 るゝは山のはのそら此十七首は未来記五十首より
 も姿うらひれ物むつかしく心はれくしからず
 すくよかならぬ心する哥也尤歌にいまくしく
 うれはしきさまとてきらふ風躰也・詩云治世之
 音安以樂其政 和 乱世之音怨以怒其政 乖
テテムム ケレハナリ ハテテル ソムケレハナリ
 といふ事も其声をもつて盛衰をはかり知事
 侍にや我國はことに歌の道よりよるつのことわ
 さをこり侍れはたゝしき所を思ふへくこそされは
 定家卿撰をかるゝ抄ともいつれもつよき哥を(六オ)
 本とし給へるよしみゆたゝしき哥の詞きよく
 うるはしきか詠吟するにめてたく聞ゆる也ある
 は人にをくれあるは身ひとつに愁ある人の述懐な

とは各別の事也それにあらて心詞とゞのはずして

いまはしき姿なるか不可然と也但いつれの様を

よめるとも詠吟よくとゞのひたらむを風躰

よしとはいふへきとそ聞侍し是詩にいへる

心に相叶へくや

近代之人所詠出心詞雖一句謹可除棄之

下の小書に七八十年以来之人所詠出之心詞

努々不用之是は制の詞とてあらしそかす

むつづるもくもるはなの露そふなとやうの詞也(六ウ)

(順徳院ノ前)

七八十年然

崇徳院ノ時節

ヨリ此カタノ人ノ

哥タルヘシ

制詞ノ作者時代

也(頭注(六ウ)

七八十年とさせる所はかりかたし若建保四年

に拾遺愚草を撰給し以其比いは、崇徳院

の御代天治大治なとよりの事と可心得にや

於古人歌者多以其同詞詠之已為流例

此詞は別にこもれる儀なし

但取古歌詠新哥事五句中及三句者頗過

分無珍氣二句之上三四字免之猶案之

五句之中及三句事無珍氣は其儀明なり

二句之上三四字免之とは如何たとへは定家卿哥

にあし引の山さくら戸を稀にあけてはなこそ

あるし誰を待らむ此歌は万葉にあし引の山

桜戸をあけをきてわかまつ君をたれかとむる(七才)

(近代ノ人)

甲斐力ネ八山ノ姿モ

ウツモレテ雪ノ半ニ

カ、ルシラ雲雅経

桜花咲ぬる時ハ

カツラキノ山ノスカ

タニカ、ルシラ雲

年々歳々

花相似

歳々年々

人不同

人丸哥ニ

足引ノ山ノハ出ル

月マツト人ニハイヒテ

君ヲコソマテト

云ヲトリテ

頓阿哥ニ

山ノハニシハシマタ

レヨ夜ハノ月

出ナハイハンコトノ

ハソナキ

又

サヒシサニ宿ヲ立出テ

ナカムレハイツクモおなし 頭注(七オ)

といふを三字とれり又同卿哥としふれは

わか黒髪もしらいとのよるは仏の名をとなへつゝと

いへるは年ふれはわか黒髪もしら川のみつわくむ

まで老にけるかなといへるをしらいとのと三字と

れりさて猶案之と侍るに尤其心あるへし

其故は古歌の二句の上三四字取之無子細も

侍るへし又取之あしきも侍へきの儀なり

いかなる哥を取てよむ時三四字くるしからぬと

ならば此末にあし引の山ほととぎすみよし野

のよしの山久堅の月のかつらほととぎす

なくやさ月玉ほこのみち行人なといへる

哥は二句にさらに文もなくてめつらしき所な(七ウ)

(秋ノ夕暮ト云フ)

秋よたゝ詠すてゝも

出ナマシ此里ノミノ

夕トおもはゝ

さよふくるまゝに

みきはやこほるらん

とをさかりゆく

しかのうら波

しかの浦やとを

さかり行波まより

こほりて出る在明

の月

心あらん人にみせはや

津国ノ難波わた

りの春のけしきを

霞ゆく難波の

春の明ほのに

心あれなと身を

思ふ哉（頭注（七ウ）

しかやうにことなる事ながらん詞つゝきたらんは
 其上三四字とりそへたりともくるしかるましき
 の心なり一ふしある詞二句つゝきたらんは三四字免
 之の儀はあるましきの故に案之とは書給へる也
 されは黄門の二首あし引の山さくら戸といふも
 年ふれはわか黒髪もと待るもめつらしき所なき
 ゆへに三字つゝ取加へてよめる也猶末にとしの内に
 春はきにけり月やあらぬ春やむかしさくらちる
 木のしたかせほのくとかかしの浦・如此之類
 雖二句更不可詠之とあり二句さへ如此いかにも
 よく分別あるへき事也家隆卿の哥に山河に
 風のかけたるしからみの色に出てもぬるゝ袖哉といへるは(八才)
 古今に春道列樹か哥山河に風のかけたる
 しからみはなかれもあへぬもみちなりけりと云を四字
 とりそへてよめり風のかけたるしからみ尤めつらし
 き詞也・定家卿の心に相違せりいかにも此抄の
 教をまもるへき者也

以同事詠古歌詞頗無念歟 下の詞に以花詠花

以月詠月といへり是を無念のよしみえたり是は
毎度の事也黄門の時代殊おほき事にや

てりもせずくもりもはてぬ春の夜のおほる月夜
にしくものそなきと待るをとりておほ空は梅の
にほひにかすみつゝくもりもはてぬ春の夜の月

月見れば千々にものこそ悲しけれわか身ひとつの(ハウ)

秋にはあらねと云を取てなかむれは千々に物

おもふ月に又わか身ひとつのみねの松風いその上

ふるの山へのさくら花つへけむ時を知人そなきと

あるをとりていそのかみふる野の桜たれうへて

春はわすれぬかたみなるらむなとよみ旅にして

妻こひすらし時鳥神なひ山にさよ更てなくと

侍るををのか妻こひつゝなくやさ月やみ神なひ山の

山ほとゝきすなとやうにおなし古歌の花鳥月

なとよめる事はおほく侍れと初心の人未学の

輩などは此旨をまもりたらむ可然哉何事も

人により時宜にしたかふへき事とそ

以四季歌詠恋雜哥以恋雜哥詠四季哥如此之(九才)

時取古歌無難歟 此心はたとへは わかやとの

むめ咲たりとつけやはこてふに似たりちりぬ

ともよし万葉、春部に朋友を思ふ歌なりそれ

をとりて月夜よし夜よしと人に告やは

こてふにゝたりまたすしもあらずと・古今によみ

朝日かけにほへる山にてる月のあかざる君を山

こしにして万葉の恋哥也是を朝日影にほへる山

の桜花つれなくきえぬ雪かとそみる如此本歌をは

とるへきの教也但恋哥をとりてそのまゝ

恋をよみ雜哥にて雜をよむ如此よめるも

ならひなれと先此抄の旨を得事學者の

心なるへしとそ近代之人所詠出之詞雖(九ウ)

一句謹可除棄といふよりこゝまではその色々

の趣旨以本哥を取て歌よむへきの故実也

誠にこまやかなる教にや

常觀念古歌景氣不染心 此道の好士思ふへき

所は此一段也寛平以往之哥は長高く詞や

すらかに心幽に余情かきりなし仍いつれの先

達の教にもかはらぬは此一儀なり

特可見習者 古今 伊勢物語 後撰 拾遺 三十

六人集之内殊上手歌可懸心人丸・實之・忠岑・伊勢・小町之類

或説・伊勢物語を・古今・後撰の中にをく事

古今は花実相兼たる集也後撰は実過たる集

なり・伊勢物語は花過たるものなれは取合て(十才)

古今の下にをけりと云々不用之当流の心は

・伊勢物語は・古今・以前の物なれと古今は此道

の奥儀也仍第一にをく所なり彼物語又ひさ

しき物なれは後撰より未にはをきかたき故に

第二に是をくけるとそ又三十六人集をあけ

て上手の哥といへる尤無双の事にや

此五人をあけて類と云詞五人の外に猶

是に准する人ありとみゆ尤可習知事

とそ

雖非和歌先達時節景氣世間之盛衰為知物由

白氏文集第一第二帙常可握翫

時節の景氣を先達に対していへるは如何と(十ウ)

おほえ侍れと心を道に引入る物は時節景氣

世間之盛衰也誠面白こそ時節景氣とは花鳥

月雪朝の露夕の煙山野草木この事たれ

か是をわきまへさらん歌人は人の心もいたらぬ

さかひものゝあやめもわかぬやみの夜の空にも

心を付へき事肝心たるへし家持かわたせる

橋にをく霜のとよめる心にて可思之事とそ

又時宜を時節景氣のうちに取へしとそ所謂

業平惟たかの御子にわりなくとゝめられて

くるしくはおもひなから枕とて草引結ぶことも

せし秋の夜とたにたのまれなくといひまた

人の前裁に菊つへけるにうへしうへは秋な(十一オ)

き時やさかさむ花こそちらめなどよめるみな

其心なり芹川の行幸に行平卿翁さひ人な

とかめそかり衣けふはかりとそたつも鳴なると

よめるはをのかよはひをおもひけれと時の御門

五十七にならせおはしましければ御けしき

あしかりけりされは時宜を時節のうちにいへる

事面白也又世間の盛衰是又作者の殊思ふへき

理なり盛衰は人に限るへからすひる夜の月

日みな・成・住・壊・空・却にはなるゝことなし此理

を思へはいはずして言の葉つちにうごく物也

されは道の専一只此事にや又白氏文集第一

第二帙といへるは長恨哥琵琶行などの事也(十一ウ)

楽天か文はやすらかにしてしかもあはれふかく

侍るゆへにふかく和歌の心に通すといへる也常

可握翫とは左右を放たすみるへきの心也物のよしを

しらむかためには此道の仮名の四十七字を出す

して心をつへき物といへと才学なくては

叶ましきの心なり初に心は新といふより

一々此道の学者可思慮之大綱也仍哥を

よむの大概明者也

和歌無師匠只以旧哥為師染心於古風習_本

於先達者誰人不詠之

此詞は初にたちかへり和歌の大すちめをいへる

者也以旧哥とはいつれの時をさすへきならば(十二才)

万葉を先として寛平御哥合三代集までを

いふへきにや上に和歌無師匠といひて詞を

先達にならはと侍れは事たかうやうなり

但詞を先達にならふ外無師匠と云儀也

猶以無師匠といへる事可有子細者也

秀歌之躰大略 此大略といふ詞は詠哥大概と

かける同心なり秀哥は限りなしといへとも此百

首を大略とする義也此内当時の哥侍るは古今

遠近を論せずよろしき哥をみてといへる其始終也

隨筆味之覺悟云々

祇注如件(十二才)

秀歌躰大略

秀歌とは歌にとりての上品の哥成へし大

略といへるは大概とおなじやうなれともすこ

し心かはり侍へし

随筆味之覚悟書連之古今相交狼藉無極

者歟

端の小書に古今遠近を不論といへる心にて

上古当世の哥相交て秀歌たるをしるし付ら

れ侍るならし

壬生忠岑

1春たつといふはかりにやみよしのゝ山もかすみてけさはみゆらん

此哥は公任卿は和歌の九品の最上にをかれまた(十三才)

定家卿は此百首の巻頭とせり哥にをきての最上

たるよし也心は春たつといふ斗といへるはたゝ口す

さひにいふ斗にやと云心也されと人心の別なる故

にいつしか山もかすみてけさはみえたるといへる成へし

是人間の人ことに人のといへはといひかくいへはかく思ひ
なす事眼前の境界なり猶師説をつくへし

光孝天皇

2 君かため春の野に出てわかなつむわか衣手に雪はふりつゝ

是有心跡の哥也有心跡とは心の残るを云也

詞のたらぬといふ哥にはかはるへし能々分別すへし

心は雪はくるしみのかたへとる也君を思ふ心さし一に

くるしかるへき事をたへ凌くよし也此哥のことからを (十三ウ)

よく思ふへし

百人一首に詳なり

読人不知

3 梅かえに鳴てうつろふ鶯のはねしろたへにあは雪ぞふる

梅か枝に鳴てうつろふとは枝つつりなとして鶯の告

たる春なるへし喜遷発曲なと漢語にはいへる此心

おなしき也いまた春浅くて鶯はうつろへとも猶ふる雪

にうつもれてはね白妙にといへるなるへし

柿本人丸

4 梅花それともみえず久堅のあまきる雪のなへてふれゝは

心は梅花のそれともみえぬほと降たる躰也天きる雪は

天霧也雪などのやうにみえわかぬなるへしなへてはをしなへて也(十四才)

紀貫之

5 人はいさ心もしらす故郷は花そむかしの香にほひける

事書にはつせにまうつることにやとりける人の家に

久しくやとらて程へてのちにいたりければ彼家のあるし

かくさたかなむやとりはあるといひいたし侍ければ

そこにたてりける梅花を折てよめりけるかくさたかに

なむとは久しくをとつねはたしかにあらぬやとりもそあ

るらんと疑いへる也哥の心は明也貫之の哥には余情

尤おほき哥也此故郷はたゝやとりつけたる所をいへる也

6 さくら花さきにけらしも足引の山のかひよりみゆるしらくも同

此哥は山のかひよりみえて白雲のことくなる花なるへし

かひは霽ハレなり山のあひ又きはなどの心とみえたり(十四才)

此哥は常の歌たてまつれと仰られければよみて

たてまつると侍りすこしこゝろかはれり古今御代の

哥なり猶可受師説

山辺赤人

7 百敷のおほみや人はいとまあれやさくらかさしてけふもくらしつ

百官の座をしくゆへに宮中を百敷といふなり

春野遊の心大宮人は暇あるらし桜をかさして

けふもくらしたと時を感じたる哥也

俊頼朝臣

8 山さくら咲そめしより久堅の雲井にみゆる瀧のしらいと

山桜の咲そめしより瀧の白糸といへるは散まての

心なるへし久堅とは雲井といへる枕詞也天はひさ(十五才)

しく堅まれる故に久堅とは雲とも月ともそらの

ことをいふへきたため也又膝形と云説もありこれは

天照太神天岩戸をひらきて出給ひし時御膝の

そと出たるを見て膝方の天ともいひつたへたり花の

瀧なといへるは落花の心もあるへき也

後鳥羽院

9 桜咲とを山とりのしたりおのなかくし日もあかぬ色かな

是は俊成卿九十賀和歌所にてせしに屏風の絵

遠山に花咲たる所をあそはしたる御製也仁和の御

時僧正遍昭に七十賀のを給ける例をもつて九十賀

はおこなはれし也さて御哥は人丸の足引の山鳥

のおの哥を本歌とせり桜さく遠山とりとをかれ(十五ウ)

たるは遠くかすめる躰をあそはされたる也永々し

日もあかぬとは千々万歳までもと帝位もつゝかまし

まさず釈阿（マ）を祝せられたるなるへし

西行法師

10をしなへて花のさかりになりにけり山のはことにかゝるしらくも

満山紅にて霞をも雲をもみな花とみたるよしなり

されは人間の有様かくのことし一人の威徳をもつ

て万人の徳化となることくなるへし山のはことにかゝる

雲もみな花とみたるよし也西行か哥の骨也

素性法師

11いさけふは春の山へにましりなむくれなはなけの花のかけかは

いさといふはさそひたるよし也くれなはなけとはくれ(十六オ)

たりともあるましき花のかけかと花に枕せんことを期
 したる也又なけの筆つかひなといふはなけやりさまなる
 と云なるへしなんと云字に心二ありやかすとも草はもえ
 なむ春日野をたゝ春の日にまかせたらなん此二の
 なんもえなむは下知にあらざるなりまかせたらなんは下知
 の詞也ましりなんも下知にてはなしたゝてにをはの詞也

読人不知

12 桜かり雨はふりきぬおなくはぬるともはなの陰にかくれむ

さくらかりなとせむといてたつに雨降出たるにおなし

くは花の事にもぬれはやといひたるなるへし桜かり

葦かりなといつれもみに行心なるへし

小野小町(十六ウ)

13 花の色はつつりにけりないたつらに我身世にふるなめせしまに

春いたり花の咲へき比は必尋みるへき心をおもひ

きぬるに徒にたゝ我身の世にふるましはりのひま

なきに打過しゝするに長雨さへふりぬれははや

花の色はつつろひぬるなとち歎てうつりにけりなと

いへる也又の心は花の色とは小町か我身のさかり

おとろへ行きまをよめりわか身世にふるなかせしまとは

詠る義也世にしたかひ人になひき人にあらそひ世を

かこち身をうらみなとするにより物なけかく打なかめ

なとしてするまに我身の花なりしかたちはおとろへ行の

心なり人ことにおもふへき身上をわするゝもの此

ことはり侍へきことにこそ(十七才)

俊成卿

14 又やみむかたのゝみのゝ桜かり花の雪ちる春の明ほの

又やみんと云て又やみさらんと云心侍る也家隆卿の

哥に又やみんまたやみさらんとよめるを俊成卿は難

せられけると也此花のおもしろさは又やみんと我心に

自問自答したる也交野の花伊勢物語にも

みえたり花の雪ちる落花也面白曙也

紀友則

15 久堅の光のとけき春の日にしつ心なく花のちるらむ

心はおほかた風のさそふ花なりともいたうちらんは

花のうらみと成へきをまして春の日のゆうくとてら
 して久堅の空もかすみわたれる比鳥の声草木の色（十七ウ）
 ものとかなるにちる花をうらみてしつ心なく花のちるらむ
 とはいへる也此哥よく工夫すへきとそ師説侍し

後京極撰政

16 あすよりはしかの花園まれにたにたれかはとはむ春のふる郷
 六百番哥合に惜春哥也花に人目見し春もつ
 つりて今よりは誰かはとはむと旧都の哀をいひた
 る哥也三月尽の哥なればあすよりはといはれたる也

持統天皇

17 春過て夏きにけらし白妙の衣ほすてふはあまのかく山
 右哥春過て夏きにけらしといへる勿論の事にて
 よろしからす聞え侍るやうにしらさる人はおもふへきにや
 此哥は更衣の哥也其故はあまのかく山は高山にて春の（十八才）
 間は霧ふかうおほひかくしてそれともみえぬか春過ぬれば
 霞も立散して夏のそらに此山さたくと明白にみゆるを白
 妙の衣ほすとは云也ほすは衣の縁也いかてか明にみゆ

めれはとて白妙の衣といふそといふ人あり春は霞の衣におほ
はれたる山其霞の衣をぬきたるやうなれば白妙の衣とはいへり
霞の衣をもていへる詞也されは春過てといふも夏きに
けらしと云も皆用に立て大切の詞也此哥新古今集

夏の巻頭にいれり更衣の哥の故也如此事尤心中にこめ
て人にあらはすへからすとそ侍し此哥をとりて定家卿

大井河かはらぬぬせきをのれさへ夏きにけりと衣ほす也此哥
はぬせきにかゝる波を衣といへり是等にて可得其心

俊頼朝臣(十八ウ)

18 みわたせは波のしからみかけてけり卯花さける玉川の里

玉川のさとは卯花の名所也垣根に咲つゝきたるは

さなから浪のしからみと云哥也

俊成卿

19 五月雨は焼藻の煙うちしめり塩たれまさる須磨のうら人

五月雨はと云に二の心あり五月雨はと云に五月雨の比

はと云心あり是は比はの五月雨也さらぬたに須磨の

うらはわひしきにもしほなと焼て打けふりたる袖しほ

たれぬへき時節也焼塩は藻をたくなり

西行法師

20 みちのへのし水なかるゝ柳かけしはしとてこそたちとまりつれ

行路の柳陰にて納涼さそあるらん殊に水辺の柳水（十九才）

にうつりたる下はさなから一葉散たるかとおほえ侍る

景気尤もたくひなくやいかなる行客成ともまつたち

より侍らぬはあらしとおもひやるはかりの哥也

清輔朝臣

21 をのつからすゝしくも有か夏ころもひもゆふくれの雨のなこりに

夏衣といひてひもとつゝけたるは衣のひも成へしを

のつからといへるや天然の五文字ならんとおほえ侍り雨の

名残は日も残れとも自然に納涼の躰返々大切のくさり成へし

俊成卿

22 いつともおしくやはあらぬ年月をみそきにすつる夏のくれかな

捨る四時ともにつつり行ことのおしからぬはなきを夏は熱

惱の気にて人の心も煩しきこと也されは夏なき年と（十九ウ）

おもひける哉といひ夏冬誰か隠さるへきとよめる皆これ

夏をいとふ心也されともいつとてもおしくやはあらぬといひて
夏をさへしたへる景気奇妙の詞つゞき成へし心は御被に
すつる夏の暮さへおしきといへる也神妙の風骨なるへし

安貴王

23 秋たちていくかもあらねとこのねぬる朝けの風はたもとすゝしも
早秋の躰也秋立ていくかもあらしいまたこのねぬる
朝なとこそ秋かともおほえ侍るにはや初かせの袂に
涼しきよしさありぬへきよしなり

恵慶法師

24 八重律茂れる宿のさひしきに人こそみえね秋はきにけり
事書に河原院にてあれたる宿に秋来といふこゝろを（二十才）
人々よみけるにと侍此事書にて心はくもりなく聞て侍れと
いにしへ此おとゞさかえし時世の人の心よせし事などは
夢のやうにて昔をわすれぬ秋のみ来たる心を
哀と打ことはりたるさま類なくや能々河原院の昔
を思ひつゞけて此哥を見侍るへき也貫之かとふ人も
なき宿なれと来る春は八重むくらにもさはらさりけりと云

哥にかはる事侍らす昔はかやうにも読みけるにや今は
等類にて侍へし貫之か哥よりは猶その哀ふかゝるへし

寂然法師

25秋はきぬ年も半に過ぬとや荻ふく風のおとろかすらむ

惣しては秋は陰の季たるによりて悲しきもの也必哀

なるへきにはや当年も半に過ぬと思ふ折ふし荻の音（二十ウ）

しておとろかし侍けん尤哀なる哥也光陰のうつること誰も

知かほにして誠にはしらぬなるへしよく工夫すへき哥也

西行法師

26哀いかに草葉の霜のこほるらん秋風たちぬみやきのゝ原

旅行のみち何となく物悲しきにはや秋風もたちて物

冷しき折ふし故郷の事を思ひやりたる成へし秋風

たちぬ宮城野は名所の宮城野なるへし宮中をも

宮城野と申侍る又此哥を故郷の事ならて見る説も

侍り好士の所好たるへし一宮城野の原を故郷にて思ひやりたる
一説在之是又奇妙之説なり

大江千里

27月みればちゝにものこそかなしけれわか身ひとつの秋にはあらねと

大かた理明也猶月は陰の気なれば打なかむるにも心す（二十一才）
 み哀すゝむるもの也されはちゝにもこのそ悲しけれとい
 へり下句は我身ひとつのやうにおほゆる心をいはむとて
 身ひとつりの秋にはあらねとゝいへる也長明か我身ひと
 つのみねの松風といへる此心なり

後京極撰政

28 故郷のもとあらの小萩咲しよりよなく庭の月そうつるふ
 本あらの小萩とは去年の枯たるふるはのこりて
 それより葉のいてたるをもとあらとはいふされは故郷の
 もとあらの小萩咲しよりよなく月もてりそふとなり

俊頼朝臣

29 あすもこむ野ちの玉川萩こえて色なる浪に月やとりけり
 玉川のほとりの野路なるへしいろなる波とははきに（二十一ウ）
 置たる露の事なるへしあすもこむとは終日あかぬ
 心をよくいひおほせたる詞也必あすもこむとには
 あらす終日花にあかて猶又あすもこむといへる
 花をおもふこゝろとなり

家隆卿

30 なかめつゝおもふもさひし久堅の月のみやこの明かたのそら

是月宮殿の事也天上五衰をいへるなるへし

なかめつゝおもふもさひしは天人の五衰をおもひや

りたるなるへし

後鳥羽院

31 秋の露やたもとにいたくむすふらん長夜あかさやとる月かな

秋の露やたもとにいたくとは涙なるへし長夜あかさ (二十二才)

やとる月哉といへる見どころある御哥よく心を

つけてみ侍るへき也

よみ人不知

32 鳴わたるかりのなみたやおちつらん物おもふ宿の萩のうへの露

さらぬたに秋は悲しきに鳴わたる雁のなみたなとに

てこそはあるらんひとり居て物思ふやうに花もし

ほるゝまで置たる露かなといへる哥也

読人不知

33 秋かはなちるらんをのゝ露霜にぬれてをゆかむさよは更とも

小野は名所にはあらずたゝ野也夜思野花哥也

萩か花ちるらんとをしはかりてぬるゝともさよ更ぬとも

ゆかむとつづるふことをかなしみていへる哥なり(二十二ウ)

天智天皇

34秋の田のかりほのいほの苦をあらみわか衣手は露にぬれつゝ

かりほの庵とは一説は苅穂の庵一説はカリイホノ庵

なり苅穂の時もかりをとよむへきとそ但猶かり

いほの庵よりしかるへきにやいにしへの哥は同事を

かさねよむ事常の義也さて歌の心は秋田の庵の

其時過て秋も末に成行て苦なとも朽終て露をふ

せく事もなきまゝに露はたふくゝと置あまりたることく

我袖のぬるゝよし也是は王道御迷懐の御哥也此君は

九州におはしましける時世を恐給てかるかやの関をたて往

来の人をなのらせてとをし給しことあり天子の御身にて

御用心の事あるは王道もはや時過るにやとおほし(二十三オ)

めす御心也時過たるかりほの庵にて可覚悟とそ

猶可尋之

此哥は上代の風也上古は心たによく思入れは詞は
子細になき多かるへし能々余情を思ふへき事とそ

文屋朝康

35 白露に風の吹しく秋のゝはつらぬきとめぬ玉そちりける

風の吹しくはしきりの儀也あらき風と云也つらぬき

とめぬ玉とは玉は系にて繋くことありそれをぬき

みたしたるよといへる也その歌の心は秋の野の所

せきまで置みちたる朝の露のおもしろきに俄なる風の

あらくと吹たるにをもちるはかりなる木草のはらくと

散みたれる当位をよめりよくく景氣を心に含て(二十三ウ)

見侍へき哥也

清輔朝臣

36 龍田姫かさしの玉の緒をよはみ乱にけりとみゆるしら露

秋の露の乱慢したるをみて是は龍田姫のかさ

しの玉の緒をよはみみたれたるかといへる哥也龍田

姫とは秋をつかさとる神也又佐保姫は春山姫は

雑なるへし緒をよはみとは玉はつらぬく物なれば

其緒のくつろきてかとなり

西行法師

37 白雲をつはさにかけて行鷹の門田の面のともしたふなる

此哥は雲井に遠く行かりの門田の面におちて

やとりたる鷹の声を聞て我一行かとおもひてこ(二十四才)

糸を合たる躰也鷹はつらをみたさぬもの也思ひか

けぬ奇妙の風骨なるへし

よみ人しらす

38 秋風にさそはれわたるかりかねは物おもふ人の宿をよかなむ

(三行寄五)

式子内親王

39 千度つつ礎の音に夢さめて物おもふ袖の露にくたくる

千たひうつとはしけき心也いかなる物も夢をさまらむ(三)

ね覚には哀なるへきにごとさら物おもふ人のね覚を

しはかりてみるへき御哥也(二十四才)

大式三位

40 遙なるもろこしまても行ものは秋のねさめのこゝろなりけり

秋のねさめの悲しさ明やうて物おもふそらにはあらぬ境界
 の事までおもふあまりにしらぬ唐のとをき所まで
 心のゆくなるへし

経信卿

41 夕されは門田のいな葉音つれて芦のまろやに秋風ぞ吹

此哥は田家秋風といふことをよめりあしの丸やとは

さなから芦はかりにてつくるを云也その門田の稲葉に

夕暮の秋かせそよくと音信ると聞もあへすやかて

あしの丸やに吹たる様也夕されは夕くれにおなし

但少風情をもつころあるにや此五文字五句によく(二十五才)

わたりおかしく侍るなるへしかやつの所をいかにも

あちはふへきこそ

寂蓮法師

42 さひしさはその色としもなかりけり楨たつ山の秋の夕くれ

楨などは深山の木也さひしさはかならすその事とは

なけれとも深山の秋の夕などのありさま尤感深き哥也

其色としもなかりけりといへるなに色とあねは心を

やりて慰かたもあるもの也比類なきやうに侍る也

式子内親王

43 それなから昔にもあらぬ秋風にいとゝなかめをしつのをたまき

それなからとは秋風はむかしも今もそれなからと也

昔にもあらぬは我心のむかしにもあらすなす秋風なれば(二十五ウ)

過にしかたになさまほしきよし也賤のをたまきとは

賤の緒をくる物也くりかへすといふ心也をたまきと

云に二の心あり一は深山などに枝もなく枯はてたる

木の事をもいへりたつをたまきなどいへるは此心なり

是哥はしたのをたまき也

44 吹からに秋の草木のしほるれはむへ山かせをあらしといふらむ

此哥は古今にも詞たくみなる類にいへり心は明也

山風をあらしと云と付て文字の儀を云は當時に

不用たゝ山の風はあらしきのなれば風といふとい

へり吹からにとは則の心なり

柿本人丸

45 さをしかの妻とふ山の岡へなる早田はからし霜はをくとも(二十六オ)

色つけは門田よりかるもの也妻とふ山の岡へ近き
 住居などにこのわさ田をかり侍らは鹿も立所をう
 しなひてなくましければ早田は霜をくともかるま
 しきと也鹿を愛したる哥也

読人しらす

46 おく山に紅葉ふみ分なくしかの声きく時そ秋はかなしき

此哥はおく山にといへる所尤以肝心也秋ふかく

成行て端山などはあらはなる比深山の陰をたの

みて鹿はある物也俊恵哥に 龍田山梢まはらに

なるまゝに深くも鹿のそよくなる哉といへるにて可心得

さて心はいかにも秋ふかくなりはてゝ深山の紅葉の

散しけるを踏分て鹿の打佗なく比の秋いたりて (二十六ウ)

悲しき心也此秋は世間の秋也こゑきく人に限へからず

されは余情かきりなきにや侍らむ此哥いつれの先達の

義にか侍らん月やあらぬ程の哥といはれけるとぞ

菅家

47 秋風の吹あけにたてるしら菊は花があらぬか波のよするか

吹上は紀州の名所也秋風の吹上といはん為也

花かあらぬか波かなといへるも菊を愛して様々に

みなし侍る事心もふかゝるへし能可吟味哥也

凡河内躬恒

48 心あてにおらはやおらん初しものをきまとはせるしら菊の花

おらはやおらんは重詞也いつれもあらまし事也その心は

白菊の面白盛なるは無類おほゆるに初霜のいたう(二十七才)

ふりたる朝なとうちなかむれは一入哀と思由也霜

をも菊をもならへて愛したる哥なるへし

紀貫之

49 白露もしくれもいたくもる山は下葉のこらす色つきにけり

江州守山なるへし露時雨ももるゆへ下葉まで

残りなく染たる紅葉といへり

柿本人丸

50 たつた川紅葉ゝなかる神なひの三室の山に時雨ふるらし

たつた川は神南備三室山つゝきたる名所也此

山々に風吹は山の下もみちともの散行てさなからに

龍田川になかれたるを時雨もこそ降らんとおもひやり
 たる心感も深き哥也奈良御門万葉をえらはれし(二十七ウ)
 時古代にせられし哥也猶師説をたつぬへし

読入しらす

51秋はきぬ紅葉は宿にふりしきぬ道ふみ分てとふ人はなし

秋はきぬ紅葉は宿には非来字尽ヌナリ秋は悲し

きといへとも馴きてと也かくやとせしにはや秋も

へぬ愛せし紅葉もふりしきぬ道踏分て問人もなし

様々にわひたる哥也私云秋はきぬは去の心と云々

去来同前云々離字ツクトヨム

在原業平朝臣

52ちはやふる神代もきかす立田川からくれなゐに水くゝるとは

心は秋の暮又神無月なと龍田河の水もなきまで

散しきたる木葉に水たゝ紅をくゝりたる様なるを(二十八オ)

神代にもかゝる事はきかすといへり業平の

哥は大略心あまりてことはたらぬを是心詞か

けたる所なき故に此哥入らるゝ也是を以此百

首の趣をみ侍るへきにこそ

春道列樹

53 山河に風のかけたるしからみはなかれもあへぬ紅葉なりけり

此哥は志賀山越にてよめる哥也こゝろは山河

などに落葉のひまなく降みたれ水の行末もみえぬ

はかりなるを思ひまはして風のかけたるしからみそと

先いひなしてさて下句にてかくみゆるしからみは

流もあへぬもみちなりけりとことはれるなり流も

あへぬといふはさらにひまもなく落る木葉をいへる也(二十八ウ)

その心はたゞ山と河との眺望なるへし風のかけ

たるしからみまことに初ていひ出たる妙所なり

源信明朝臣

54 ほのくゝと在明の月の月影に紅葉吹おろす山おろしのかせ

ことはのくさり対句也上手のことからなり更に弁

かたきもの也心は明也誠にすさまじきすかたよく

吟味すへし

後鳥羽院

55 深みとりあらそひかねていかならむまなく時雨のふるの神杉

まなく時雨といへる也ことに見所ある哥ならむふか

みとりにあらそひかねて時雨のふるの神杖といへり

時節景気也(二十九才)

西行法師

56 秋篠や外山の里やしくるらむいこまのたけに雲のかゝれる

秋しのいこまちかき名所也此山雨ふらむとては

くものかゝれはいこまの山にかゝる雲をみて秋篠の

外山は時雨そし侍るらむと也秋しのやのやの字は

たゝ云たるやなり外山の里やのやにておさへたる

やの字なるへし

清輔朝臣

57 冬枯のもりの朽葉の霜のうへに落たる月の影のさやけさ

冬の月はさらても冷しかるへきに林下落葉

して梢さひしく成はてたるに霜置まとひたる朽葉

の月おもひやるさへ肝心ひやゝかなる哥也よく吟

味すへしとこそ(二十九ウ)

58 君こそはひとりやねなん篠の葉のみ山もそよにさやく霜夜を

さゝの葉は深山にあるもの也是も序哥の類也深山も

さやにはさえたる躰也又さやく物なればかくいへり

冷しきよしなり

後京極撰政

59 かた敷の袖の氷もむすほゝれとけてねぬよ夜の夢そみしかき

かた敷の袖の氷とは涙なりなみたさへこほりぬれば

とけてねかたき夜はの夢おもひやらるゝはかり也夢の

みしかきとはねぬ心なるへし

柿本人丸

60 矢田の野に浅ち色こきつくあらち山みねの淡雪さむくそあるらし

矢田の野はあらち山へ行みち也矢田野の浅茅の色

つきわたれる比ははや少々あらち山に淡雪降ぬらむと

思ひやれる心也色つく矢田の野をたちいてゝあらち(三十才)

山へおもむくらむ様をしはかられておもしろき景気な

るへし

読人不知

61 故郷はよしのゝ山し近ければひとみ雪ふらぬ日はなし

此故郷は天武天皇大友皇子におそはれて此山に

こもり給へるより皇居としてありしを故郷はよしのゝ山しとはよめりよし野の山は深き山なる故

に初雪とくより降そめて春まで消ぬ所なり

62 今よりはつきてふらなむ我宿の薄をしなみふれる白雪

秋うつりかはりて万草枯はてゝ物さひしきにめつら

しく降たる雪を感じてつきてふれと下知したる也

薄などの秋すきて枯たちたるに雪のふりかゝりたる

景気おもひやるへし(三十ウ)

坂上是則

坂上是則

63 朝ほらけ有明の月とみるまでに芳野の里にふれるしら雪

此哥はかの里の眺望とみ侍るへき也里にふれる

しら雪とはつすき雪に侍る也在明の月といへるにかな

へる心を付てみ侍るへきこそ

後京極撰政

64 いそのかみふるのゝをさゝ霜をへて一夜はかりに残るとしかな

例の序哥也一夜はかりにのこるといはむためなりいその
 かみとは大和国磯上のこほりにふるの明神とておはし
 ますいそのかみはふるのゝをさゝといはむため也ふるの明神は
 年をへてといはむためなり一夜はかりに残るはをさゝ
 なるへし

経信卿(三十一才)

65 君か代はつきしとそおもふ神風やみもすそ川のすまむ限りは
 祝言の哥に如此おもしるきは初例なるへしと定家
 もいへるなり神風やみもすそ川とつけたるは百王
 守護の鎮護の国家尤無比類哉

僧正遍昭

66 ずゑの露もとの雫や世中のをくれさきたつためしなるらむ
 本末究竟の心なりをくるゝかとみれはさきたちさき
 たつかとおもへはをくるゝ不定世界の境界尤あはれ
 なる哥なるへし

67 みな人は花の衣になりぬなり苔のたもとよかはきたにせよ
 深草御門崩御の後皆御服ぬきて或かうふり給はり

なとしてよろこへるに此宗貞は発心してそのまゝ(三十一ウ)

菩提に入たる人なり苔の袂よかはきたにせよといへる

心哀ふかき也智証大師の門人として大伝法まで

相承せられし人なり

和泉式部

68 諸共に苔の下にはくちすしてうつもれぬ名をみるそかなしき

是は小式部内侍にをくれて和泉式部かよめる哥也

上東門院より御衣を給はりたるをみてよみし

と也小式部は和泉式部か子なり

道信朝臣

69 かきりあれはけふぬきかへつ藤衣はてなき物はなみたなりけり

親のふくにて服ぬき侍るとことかきにあり孝

道あはれなる哥也藤衣はいろの衣の事なりけふ(三十二オ)

ぬきかへつとは一周忌成へし

後鳥羽院

70 おもひ出るおりたく柴の夕けふりむせふもつれしわすれかたみに

以下の両首は母遠行の時の御製といへりなき人の

おもかけ思ひ出ていひもやられぬ哀はたゝ折たく柴の
 夕けふりにむせふやうなりそれを忘かたみとおほし
 めせはうれしきと也哀傷の哥につれしとよめるは
 初例のやうに定家も申されし尤哀ふかしく吟
 味すへし

71 なき人のかたみの雲やしほるらむ夕の雨に色はみえねと

同上の御歎の折ふしといへり御袖の涙をなき人の

かたみの雲のしほるやらんとおほしめす也唐に朝には (三十二ウ)

^本厚雲と成夕には紅雨と成て来むと巫陽台の

夢のこをととりてあそはしたる成へし

行平卿

72 立別いなはの山の峯に生るまつとしきかは今かへりこむ

此哥は俊成の儀に余にくさり過てよからされと

今かへりこむといひなかしたる幽玄也とそ心は明也

待人たにあらはやかて帰りこむといふ心也あらし

と思ふ心をいへるよし也

紀實之

73 白雲の八重にかさなるをちにてもおもはむ人に心へたつな
 たとひいかほと海山をへたつるとも我思はむには人の
 心をへたつなど也

行平

74 わくらははにとふ人あらはすまのうらにもしほたれつゝわふとこたへよ（三十三才）
 わくらはとはたまさかなる事也邂逅と云也又春の若
 葉のみちのことく色うつしく立出たるをもわくらは
 といふ是も稀なる心也心は行平卿彼須磨の浦にし
 てしむ稀に問人あらはもしほたれつゝわふとこたへよ
 といへるなりもしほたれつゝとは涙の袖のかはかぬなるへし

菅家

75 このたひはぬさもとりあへず

是は宇多御門奈良へ行幸の御時御供にてよみ
 給へり此たひは旅の字と云儀あり其心もたかふへ
 からすといへとも度の字よく侍るへきこそぬさもとり
 あへすと云に行幸のさはかしき心こもれりされは山の
 紅葉をそのまゝ神にまかせて手向心なり君につ

かふる道のたたしき心なと是にて思ふへし手向山(三十三ウ)
南方にありまた相坂をもちへり

俊成卿

76 には人あし火たくやに宿かりてすゝろに袖の塩たるゝかな

難波のうらは景気こそおもしろけれさひしきうら

なるへし芦火たくやに宿かりてといひてはすゝろ

といはむためなり煤の心ありたゝ心八そ敷すゝろも同

也芦火よりは煤の字をかりてすゝろと云也かやうの

うらの旅懐おもひやるへし

77 立かへりまたもきてみむ松しまやをきのとまやの波にあらすな

松嶋小嶋無比類境地也立かへり又もきて

みむとは必又こむにてはなし興にあかぬ余の言葉

なるへしをしまの苦やの浪にあれてかはりやせむと(三十四才)

侘たる哥也是人々の境界をいへる哥なるへし

衰行ことさらに苦屋にも限るへからず分々に

随てうつりゆくならんかしたちかへり又もきてみむ

といへる心着して輪廻の妄執ともならむと也

家隆卿

78 明は又こゆへき山の峯なれや空行く月の末のしらくも

あけは又越へしと行路の遠景やうく旅宿の

心を静め侍るまゝに見やりたる眺望尤もおもしろき

風躰也

俊頼卿

79 難波江のみにつつもるゝ玉かしはあらはれてたに人を恋はや

玉かしは石の事也藻につつもれて人のしらぬ石を

我思ひにたとへてそれはさもあれわれはあらはれて (三十四ウ)

成とも人を恋はやと也惣しては序哥なり

後京極撰政

80 もらすなよ雲ある嶺の初しくれ木葉は下に色かはるとも

家の歌合冬の恋の哥也初しくれにて涙の心もあり

色かはるとももらすなといへる忍ぶ心也

読人不知

81 東路のさのゝ舟橋かけてのみおもいわたるをしる人のなき

例の序歌也かけてのみおもひわたるをといはむため也

佐野の舟はしは下野也卅三ヶ国の時は上野なり
 さるによりてかみつけやさのふなはしと読たる哥あり

参議等

82 浅茅生ののをしにはらしのふれとあまりてなとか人の恋しき(三十五才)

上は例の序歌也しのふれとあまりてといへる尤切
 なる恋の儀也かやうにやすくと聞えたるをは思入
 事尤其人たるへしあまりてなとかに心をよく付へし
 定家卿のなをさりののを浅ちにをく露も草葉に
 あまる秋のゆふくれ此哥をとれるなり

俊成卿

83 いかにせん室の八嶋に宿もかな恋のけふりを空にまかへん

下野国室の八嶋は煙をよめる所也縁起を申出して
 拝見しつる事侍るに富士をうつして則ふしをも御
 室号するにより室の八嶋といへり八嶋は則ふし
 の八葉也さてこそ煙をよみし事もよく心のゆく
 所にては侍しとおほえ侍る也我恋の煙を空に(三十五ウ)
 まかへんと也

読人不知

84 夕暮は雲のはたてに物ぞ思ふ天津空なる人をこふとて

雲のはたては幡の手のやうなるをいへると也忘然

と物思ふ夕くれになかめ侘たるけしきをうはのそら

なる人を思ふゆへと也うはの空なる人とはあた人の事也

伊勢

85 にはかたみしかきあしのふしのまもあはてこの世を過してよとや

此難波かたとは大やうに云出たる五もし也五文字に

君臣の五文字あり是は君の姿也ひしといひつめて詮

となるもありよくく可分別哥の心は思ひそめしより

このかた人にも縁をもとめ詞をもつくし心をもく

たきあるはたのめて過しあるは又かけもはなれず(三十六才)

してとし月をかさぬれはさてもいかくせむなとおもひ

余りたるうへに打なきて言いたしたる哥也みし

かきあしのふしの問とは聊もといふ心也おほよそにかや

うの哥をはみるへからすとそ

俊頼朝臣

86 うかりける人をはつ瀬の山おろしよはけしかれとはいのらぬ物を

此歌は祈不逢恋といふ題をよめりはつせに

恋をいのる事は住吉物語みえたりはつせは

山中にて風はけしき所也惣の心はうかりける人を

はけしかれとはいのらぬものをと云心也はつせの山おろ

しははけしきの枕詞なりいのれともく人の心はけしくて

たはけしかれと祈りたるやうなればそれをかくはけし(三十六ウ)

かれとはいのらぬものをといへり定家卿の近代の秀哥

に此哥を心ふかく詞心にまかせてまねふともいひつゝ

けかたく誠をよふましき姿也

崇徳院

87 瀬をはやみ岩にせかるゝ瀧川のわれても末にあはむとぞ思ふ

われてもとはわりなつもと云心也わかことほりなき

とをかねたる哥也惣の心は水こそわれてもやかてあふ物

なれつらき人のわかれて後はあひかたきを水のあ

へることくにあらむと思ふははかなき心なりけれと

おもひかへして身をせめる哥也あはむとぞ思ふと云

中に此心ありよく工夫して余情を思ふへし

われてもとは伊勢物語にもわりなうと云心にいへり(三十七才)

伊勢

88 おもひ川たえすなかるゝ水の泡のうたかた人にあはて消めや

水の泡のうたかたとつゝ事先うたかたは水のあはの

事にてあるへし但うたかたとは寧なごなと世俗に

つかふことはの心なりさるによりてうたかた人とはつゝけ

侍らてうたかたとよみきりて人にあはてとよむへき也

歌の心は思ひ川とは我思也たえすなかるとは人の

思ひは流水ともゆる火とにたとへたるものなればかく

いへりあはてきえむかと歎く心也

柿本人丸

89 なき名のみたつの市とはさはけともいさまた人をつるよしもなし

たつの市大和也人をつるといはむため也いさ(三十七才)

または不知なり

読人しらす

90 片糸をこなたかなたによりかけてあはずは何を玉のをにせむ

序哥也あはずは何を玉の緒にせむとは糸の縁也

俊頼朝臣

91 おもひ草葉末にむすぶ白露のたま／＼きては手にもたまらず

葉末に結ぶ白露とは玉といはむ枕詞也露手に

もたまらぬ物なれはたま／＼きては手にもといへるくた

けたる風骨也是も序哥なるへし

俊成卿

92 おもひきやしちのはしかきかきつめて百夜もおなし丸ねせんとは

此歌にしちのはしかき鳴のはねかき両様ある哥也しちの

はしかきとは百夜来りて車の榻にねたらはあはむと(三十八才)

いへる人に通ひしに九十九夜までかよひて今一夜

と成て死にけりさてこそむなしき心には読侍れ

鳴のはねかきも百夜の心は同じきはねかきとする鳥^本

なれは如此いへり不会恋の心也

壬生忠岑

93 在明のつれなくみえしわかれよりあかつきはかりつきものはなし

此哥はあはずしてかへる心をよめる也在明は久しく

のこるものなれはつれなくといひ侍れと此つれなくは

人の事也心は人のもとに行て終夜心をつくしてい

かてあはむと思ふに人はつれなくてはてぬれはいかゝ

はせんと立わかるゝ比在明の月の哀も深きをなかも

つゝかへるさま也たとひ逢夜のかへさなりともかゝる空は（三十八ウ）

悲しかるへきに結句あはてわかるゝを思ひ侘て今夜

の曙はかりうきことはあらしとふよし也古今集にい

つれの哥かすく^本たると後鳥羽院定家家隆に尋給

ひけるにいつれも此哥を申されけるとそいひつたへ侍る

定家卿は是ほとこの哥一首よみて此世のおもひ出にせはや

とのたまひしとぞ

読人しらす

94名取川せゝのむもれ木あらはれていかにせんとかあひみそめけむ

名取川は陸奥国の名所也いかに忍ぶとも恋ちのなら

ひにてあはれ侍らては叶ましき瀬々の埋木とは

忍ぶ心也さはありともあらはれむ時はいかゝせんそとなり

恋といふものは忍ぶうへにも忍ぶを本意とする故也

素性法師（三十九才）

95 今こむといひしはかりになか月の在明の月をまちいてつるかな

在明の月を待ちいつる心一夜の儀にあらすためて

月々を送り行に秋さへ長月の空に成行心をよく

思ひ入てあちはふへき哥也定家の注にも一夜の事

にあらすと侍る也

元良親王

96 逢事は遠山すりのかり衣きてはかひなきねをのみそなく

此哥も両説の哥也逢ことは遠山鳥のかり衣とは

山鳥と云ものは尾をへたてゝぬるゆへに遠山鳥といへ

る也尾と云にも両説あり山の尾をへたつると云と

鳥のきとくをつかひて我尾をへたつると云は唯山の

尾をへたつる成へし清輔抄などにもさやうにかき

侍りされはあはぬ心にきてはかひなきねをなくと（三十九ウ）

也遠山すりのかり衣とはきてはかひなきとい

はむため也歌林良材などにみえたるは遠山とり遠山

すりの説山とりを文と心得たる何もすりかり衣也

柿本人丸

97 足曳の山とりの尾のしたりおのなかくし夜をひとりかもねん

此哥はことなる義なとはさらになしたく足引のと

うち出たるより山鳥のおのしたり尾のと云て長々し

夜をといへるさまいかほとも限りなき夜のなかさ也

詞つゝき妙にして風情尤たけたかしかゝる

哥をは眼をつけて数返吟して其味をこゝ

ろみ侍るへし無上至極の哥にや侍らん人丸の哥

は心を本としたる哥とそ景氣をのつからそなはる(四十才)

事天然の哥仙の徳也古今の間に独歩すと

いへる此ことほりにや

元良親王

98 侘ぬれは今はたおなし難波なるみをつくしてもあはむとそ思ふ

是は宇多御門の御時京極の宮す所に忍び

て通ひけるあらはれてのち又つかはしける哥也

侘ぬれとはよろつ思ひのつもりてやるかたなき

を云也されは今又あはずともたちにし名はお

なし名にこそあれみをつくしてもあはむとぞ思ふと
 いへりみをつくしはなにはの縁也此哥は幽玄の歌とそ
 哥はたゝ心はいふに及はすうちなかめなとしてよきあ
 しきしかるへきさまをよく吟味すへしとぞ

僧正慈円(四十ウ)

99わか恋は庭のむら萩うらかれて人をも身をも秋の夕くれ

我恋はとよひ出したる也庭のむら萩かつく咲ころ

よりはやうら枯まで心をつくしつれともつれなき

間思ひよはりて人をも身をも秋のとあきたる心を

よせたり心をつくして程ふるにおもひよはりたる心也

後鳥羽院

100袖の露もあらぬ色にそきへかへるうつれはかはる歎せしまに

被忘恋の心をとあり心は境に転せらるゝものにや

思ひそめしはかりの折ふしは常の涙にてありしか

人の心のうつり行まゝに涙もあらぬ色になり行事

尤きもを銘したる御製也

読人しらす(四十一才)

101 おもひ出るときはの山の岩つゝしいはねはこそあれ恋しき物を

是も序哥もおもひ出るときはの山の岩つゝしとは

いはねはこそあれといはむため也心はいはねはこそあれ

いはゝ恋しさのいかはかりなるへきと也

清原元輔

102 ちきりきなかたみに袖をしほりつゝ末の松山波こさしとは

事書に心かはりて侍ける女に人にかはりてと

あり心はさてもかくあたにかはるものをたかひに

袖をしほりて浪こさしと契けるよなとすこし

はちしむるやうにいへる也かたみに袖をしほるは

たかひの心也猶心のかはるをは中々うらみすして

契しを恨る心也

西行法師(四十一ウ)

103 なけゝとて月やは物をおもはするかこちかほなるわかなみたかな

月前恋の心なり終夜月にむかひてうちなかむ

るにものかなしくてたゝ月か我心にいたましむ

るやとつらめしさをおもひかへしてかくはいへり

少平懐の躰也是西行の風骨也更に

つくるふとこるなきは上手の物なるへしなを

此哥さしむきていへるはかりは感浅くや(四十二才)

(四十二丁ウ密五)

這一冊借賜

法皇御本遂書写校合畢

享保十五年仲夏權大納言光榮(四十三才)

両底本間の異同

甲本（『詠歌大概註』） 乙本（『詠歌大概抄』）

いへと（二オ） いへとも（三オ）

此旨（二オ） 此旨者也（四オ）

かゝらす（二オ） かゝらぬ（四オ）

侍るをとりて定家（二ウ） 侍るを定家（四ウ）

すこしのかはりにて物のあたらしくなる支証也（二ウ） なし

とあるを定家卿（二ウ） なし

如此類其限なくこそ（二ウ） 如此のたくひかきりなくこそ（四ウ）

といへるは（三オ） といへるを（五オ）

うへも（三オ） 上にも（五オ）

ある事こそ（四オ） ありこそ（五ウ）

しらぬ（四オ） 見えぬ（六オ）

なし（四オ） 其政和（六オ）

なし（四オ） 其政乖（六オ）

近代之人所詠出之心詞（四ウ） 近代之人所詠出心詞（六ウ）

- 努(四ウ) 努々(六ウ)
 ひかきの嬭哥後撰集嬭かくいひ侍る(五ウ) なし
 なし(五ウ) といへるは(七ウ)
 なし(五ウ) といへるをしらいとの(七ウ)
 文もなくして(五ウ) 文もなくして(七ウ)
 黄門定家(六オ) 黄門(八オ)
 定家卿(六ウ) なし
 大江千里(六ウ) なし
 古今集に(六オ) なし(八ウ)
 といふ哥を(六オ) と云を(八ウ)
 こゝろには(六ウ) 心に(八ウ)
 定家卿(六ウ) なし
 大江千里(六ウ) なし
 長明(七オ) なし
 遍昭(七オ) なし
 なし(七オ) とあるをとりて(九オ)
 万葉(七オ) なし

新古今後鳥羽院御製(七オ) なし

万葉に(七ウ) なし

新古今有家(七ウ) なし

なし 万葉春部に朋友を思ふ歌なりそれをとりにて(九ウ)

なし 万葉の恋哥也(九ウ)

先此抄を仰べき事(八オ) 先此抄の旨を可得事(九ウ)

詠出之心詞(八オ) 詠出之詞(九ウ)

ねさへかれめや(十オ) なし

世間(十オ) 又世間(十一ウ)

といへるは(十ウ) 帙といへるは(十一ウ)

いへとも(十ウ) いへと(十二オ)

不詠之哉(十一オ) 不詠之(十二オ)

習詞(十一オ) 習於(十二オ)

可子細者也(十一オ) 可有子細者也(十二オ)

此大略といふ心は(十一ウ) 此大略といふ詞は(十二ウ)

最上として(十一ウ) 最上にをかれ(十三オ)

此哥古今のごと書に(十三オ) 事書に(十四ウ)

やとりければ(十三オ) やとりける人の(十四ウ)
 花にうらみも有へきを(十六オ) 花のうらみと成へきを(十七ウ)
 ましていはむ春の空は(十六オ) まして春の日の(十七ウ)
 此帝女王にておはします也右哥は(十七オ) なし
 あぶきし事(十九ウ) よせし事(二十ウ)
 うき秋(二十ウ) なし
 御用心ある御事(二十三オ) 御用心の事あるは(二十三オ)
 巨細(二十三オ) 子細(二十三ウ)
 吹しくとはしきりにふくあらし風也(二十三オ) 風の吹しくはしきりの儀也(二十三ウ)
 ぬきみたしたるか(二十三オ) ぬきみたしたるよ(二十三ウ)
 草の露はらくくと(二十三ウ) 木草のはらくくと(二十三ウ)
 その景気をこゝろにふかくこめて(二十三ウ) 景気を心に含て(二十三ウ)
 哥なりとそ(二十三ウ) 哥也(二十三ウ)
 したふ也(二十四オ) したふなる(二十四オ)
 おとつれて(二十五オ) 音信ると(二十五オ)
 吹たるさまさひしき哥なり(二十五オ) 吹たる様也(二十五オ)
 此夕されは(二十五オ) 夕されは(二十五オ)

- こゝろあり(二十五オ)　こゝろあるにや(二十五オ)
 たくみなるに(二十六オ)　たくみなる類に(二十六オ)
 いふに付て(二十六オ)　云と付て(二十六オ)
 当流(二十六オ)　当時(二十六オ)
 不用之(二十六オ)　不用(二十六オ)
 此哥(二十六ウ)　此哥は(二十六ウ)
 山とも(二十六ウ)　端山なとは(二十六ウ)
 哥の心は(二十六ウ)　さて心は(二十六ウ)
 おらはやおらむとは(二十七オ)　おらはやおらんは(二十七オ)
 心は(二十七ウ)　その心は(二十七オ)
 さかりは(二十七ウ)　盛なるは(二十七オ)
 読る也(二十八オ)　よめる哥也(二十八ウ)
 妙義なりとぞ(二十九オ)　妙所なり(二十九オ)
 時の(三十一オ)　なし
 侍成へし(三十一オ)　侍る也(三十一オ)
 やたの野々(三十ウ)　矢田野に(三十オ)
 此哥(三十三ウ)　此哥は(三十三オ)

- よろしからず(三十三ウ) よろしからされと(三十三オ)
 いひなかしたる所(三十三ウ) いひなかしたる(三十三オ)
 供奉したてまつりて読給ふ也(三十四オ) 供奉にてよみ給入り(三十三ウ)
 猶(三十四ウ) なし
 なし ぬさもとりあへずと云に行幸のさはかしき心こもれり(三十三ウ)
 手向をなす(三十四ウ) 手向なり(三十三ウ)
 南都(三十四ウ) 南方(三十四オ)
 云なり(三十四ウ) いへり(三十四オ)
 五もしに君臣の五文字あり(三十七オ) 五もし也五文字に君臣の五文字あり(三十六オ)
 いかゝはせむ(三十七オ) いかゝせむ(三十六ウ)
 いさゝかはかりもと(三十七オ) 聊もといふ(三十六ウ)
 題にてよめり(三十七ウ) 題をよめり(三十六ウ)
 はけしければ(三十七ウ) はけしくして(三十六ウ)
 すかたなりといへり(三十七ウ) 姿也(三十七オ)
 いひ侍り(三十九オ) いひ侍れと(三十八ウ)
 つれなくみゆるは(三十九オ) つれなくは(三十八ウ)
 なし 人のもとにて(三十八ウ)

- いかゝせむ(三十九ウ) いかゝはせん(三十八ウ)
 かなしかるへし(三十九ウ) 悲かるへきに(三十九オ)
 世にうき事はあらし(三十九ウ) うきことはあらし(三十九オ)
 古今に(三十九ウ) 古今集に(三十九オ)
 定家はあはれこれほと(三十九ウ) 定家卿は是ほと(三十九オ)
 待いてつる(四十オ) 待いつる(三十九ウ)
 吟味すへき(四十オ) あちはふへき(三十九ウ)
 義なし(四十ウ) 義などはさらになし(四十オ)
 なかくしと(四十ウ) 長々し夜をと(四十オ)
 眼をつけ(四十ウ) 眼をつけて(四十オ)
 本としたるとそ(四十ウ) 本としたる哥とそ(四十オ)
 詞景気(四十一オ) 景気(四十オ)
 せむかたなき時いへる詞也(四十一オ) やるかたなきを云也(四十ウ)
 一たひ立にし(四十一オ) たちにし(四十ウ)
 幽玄躰の哥(四十一ウ) 幽玄の哥(四十ウ)
 吟味すへき事にこそ(四十一ウ) 吟味すへしとそ(四十ウ)
 女に(四十二ウ) 女に人に(四十一ウ)

かはる(四十二ウ) 心のかはる(四十一ウ)

月の我心を(四十二ウ) たゞ月か我心に(四十二オ)

かくいへり(四十三オ) かくはいへり(四十二オ)

上手の業(四十三オ) 上手の物(四十二オ)

土田氏翻字との異同(『詠歌大概註』)

本稿の翻字 土田氏翻字

きよらなる(三オ) きよらかなる

萩(四オ) 萩

只(四十ウ) 又

すくやか(四オ) すくよか

万葉集に(五オ) 万葉集に

古歌(七オ) 古歌の

みよし野のよしのゝ山(五ウ) みよし野の山

如此類雖(六ウ) 如此之類

詞ともなればかやつの(七オ) 詞ともなれば いかやつの

いそのかみふるのゝ桜(七オ) いそのかみふるの桜

古歌難歟(七ウ) 古歌之難歟

三十六(八ウ) 二十六

是ををけるなり(八ウ) 是をけるなり

上に(十一オ) 上手

已下(十一ウ) 已下

成にけり(十四オ) 成にける

小町か(十五ウ) 小町の

ふるさとゝは(十六ウ) ふるさとは

ほとをも(十九オ) ほとを

すまの(十八オ) あまの

とじの(二十オ) とじ

さびしく(二十一ウ) きびしく

物思ふやとゝは(二十二オ) 物思ふやどは

萩か花(二十二オ) 萩の花

いへる心也(二十三オ) いへる也

その景気(二十三ウ) この景気

おもひもまさり(二十四オ) おもひまさり
 その(二十四ウ) この
 袖は涙ひまもなし(二十四ウ) 袖涕はひまもなし
 おもしろきうたなり(二十四ウ) 面白きなり
 かく読む(二十四ウ) 讀る
 あらぬ様(二十五ウ) ありぬ様
 申侍らむ(二十六オ) 申侍らね
 稲は(二十六オ) 稲ほ
 秋ふかく(二十六ウ) 秋山ふかく
 おらむ(二十七オ) おらね
 よりの(二十七オ) より
 なければ(二十八ウ) なれば
 ひとりや(二十九ウ) ひとりも
 名をみるぞ(三十一ウ) 名をみるに
 色はみえねと(三十三オ) 色付みえねと
 云こゝろ也(三十三オ) 云也
 わくらはとほ(三十四オ) わくらばは

恋は（三十五ウ） 恋を

山おろしよ（三十七才） 山おろし

暫もと（三十八才） 暫も

よしもなし（三十八ウ） よしもなく

独かもねむ（四十ウ） 猶かもねむ

今井氏翻字との異同（『詠歌大概抄』）

本稿の翻字 今井氏翻字

哥若年（三才） 哥八若年

夕々（三ウ・頭注） 夕二

学者（四才） 学習

乱れぬと也（四才・頭注） 乱れぬとや

怨以（六才） 怨以

習於先達（十二才） 習出先達

曙也（十七ウ） 曙にや

なす（二十五ウ） なほ

賤 (二十六才) 紗

賤 (二十六才) 紗

なりけり (二十八ウ) なるなり

いへる也 (二十九才) いへるや

皇居 (三十ウ) 里居

袂よ (三十二才) 袂に

(はやし・たつやノ本学教授)

(いとつ・たつしノ本学非常勤講師)

(すぎやま・しゅんいちろうノ本学修士課程在学)